令和３年度

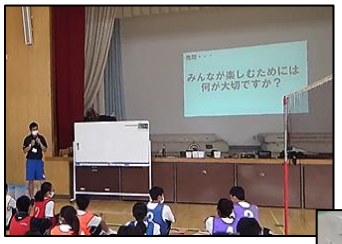
長期研修講座研究報告詳細版

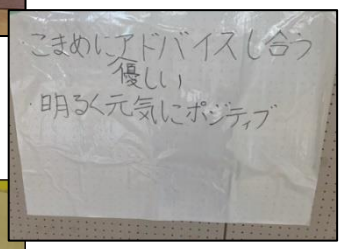
チームワークが高まり、
誰もが楽しむことができるバレーボール授業

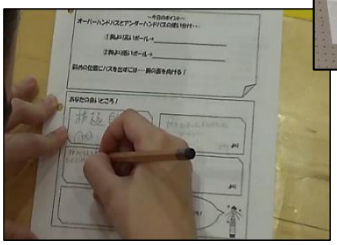
―共生の視点を重視し、
仲間との関わり方について考える学習を通して―

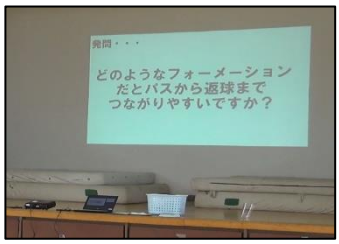
共生の視点を重視し、仲間との

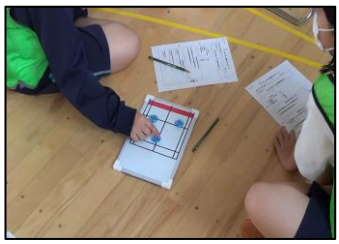
関わり方について考える学習











これまでの、
技能の向上を主に
目指していた授業に・・・

神奈川県立総合教育センター

体育指導センター　長期研究員

横須賀市立常葉中学校　井澤　祐貴

目　次

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題・・・

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題

チームワークが高まり、誰もが楽しむことができるバレーボール授業

―共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して―

２　はじめに

『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説保健体育編』(以下、『解説』という)には、「運動やスポーツの多様な関わり方を重視する観点から，体力や技能の程度，性別や障害の有無等にかかわらず，運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際，共生の視点を重視して改善を図ること。」（文部科学省　2018　p. 10）と改訂の方針が示されている。そして、「中学校学習指導要領(平成 29 年告示)」（以下「要領」という）の〔体育分野第１学年及び第２学年〕における球技の内容(3)には、「一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること」と新たに共生の視点が示され、このことについて『解説』には、「様々な違いを超えて，参加者全員が楽しんだり達成感を味わったりするための工夫や調整が求められる場合があることなどを理解し，取り組めるようにする」（文部科学省　2018　p. 128）ことが示されている。

これまでの筆者のバレーボールの授業実践を振り返ると、技能中心の指導で、運動が得意な生徒だけでゲームが展開されることが多く、運動が苦手な生徒は周囲に迷惑をかけないように遠慮してプレイしたり、話合い活動等でも非常に消極的な姿が目立ったりするなど、生徒一人ひとりが持っている力を発揮し、仲間と関わりながら練習やゲームに取り組む活動が十分にできているとは言えず、誰もが楽しめるような工夫や調整が行われた授業ではなかったと捉えている。

岩田は、「運動の達成に向けて、仲間と息を合わせ、アイディアを交流し、支え合うといった社会的行動、つまり他者との関わりが運動の楽しさを増幅させる重要な側面になる」、また、「運動の課題解決に向けたプロセスを仲間と共有していくことによってコミュニケーションを拡大させ、仲間相互の結びつきを強めていく」（岩田　2012　pp. ６‐７）と述べている。

これらのことから、誰もがバレーボールを楽しめるようにするには、技能の高まりを主に目指していたこれまでの筆者の授業実践に加えて、一人ひとりの違いを認めようとする意欲を育てるといった共生の視点を重視した指導をする必要があると考え、仲間といかに良好な関係を構築するかといった、仲間との関わり方について考える学習を通して、チームワークを高めることが重要であると考えた。

このための手立てとして、グリフィンらが提唱する、ゲームを行った後に、教師の発問と生徒の応答によって、何を練習すればよいのかを自覚させ、技術・戦術的な課題解決を図る戦術アプローチ（グリフィン他　1999　pp. 14-15）の学習過程を活用し、「どうすれば仲間との関わりが深まるか」といった共生の視点を重視した発問や、一人ひとりの違いを認め、互いの良いところを見付けたりするなどの学習活動を通して、生徒がチームワークを高めるために必要なことは何かを考え、その意義や大切さを理解・共有し、仲間と良好な関係を構築することを企図した。

以上のことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、チームワークが高まり、誰もがバレーボールの楽しさを味わうことができると考えた。また、本研究の成果と課題を報告することは、「要領」に新たに加わった「共生」を指導する今後の授業づくりに貢献できると考えた。

３　研究の目的

中学校第２学年のバレーボールの授業において、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習が、チームワークを高め、誰もが楽しむことに有効であるかを明らかにする。

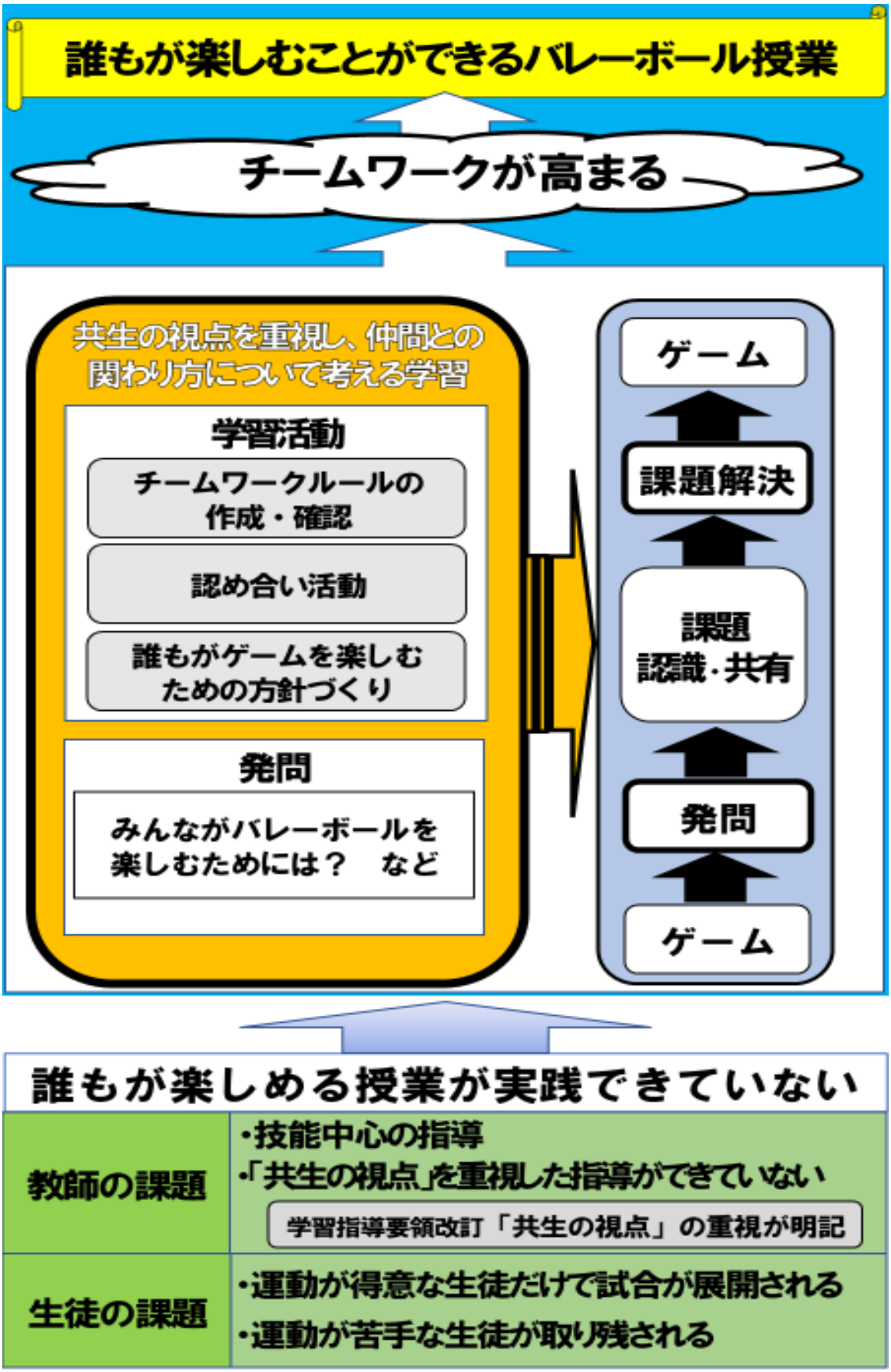
４　研究の仮説

第２学年球技（ネット型「バレーボール」）において、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、チームワークが高まり、誰もがバレーボールを楽しむことができるであろう。

５　研究の方法

（１）研究を進めるにあたって、理論的研究を行い、仮説を設定する。
（２）理論研究を基に指導と評価の計画を立て、授業を実践する。
（３）理論研究と仮説検証の結果を基に、研究のまとめを行う。

６　研究の構想図


誰もが楽しむことができるバレーボール授業
チームワークが高まる
共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習
学習活動
チームワークルールの作成・確認
認め合い活動
誰もがゲームを楽しむための方針づくり
発問
みんながバレーボールを楽しむためには？　など
ゲーム
課題解決
課題認識・共有
発問
ゲーム
誰もが楽しめる授業が実践できていない
教師の課題
・技能中心の指導
・「共生の視点」を重視した指導ができていない
学習指導要領改訂「共生の視点」の重視が明記
生徒の課題
・運動が得意な生徒だけで試合が展開される
・運動が苦手な生徒が取り残される

第2章　理論の研究

１　バレーボールについて

（１）バレーボール（ネット型）の特性について

『解説』では、「ネット型とは，コート上でネットを挟んで相対し，身体や用具を操作してボールを空いている場所に返球し，一定の得点に早く到達することを競い合うゲームである」（文部科学省　2018　p.124）と示されている。高橋はネット型を、テニス・卓球・バドミントンのような攻守一体型と、バレーボールやプレルボールなどの連携プレイ型の二つの型に分類した（高橋　1994）。

岸は「バレーボールに代表される『連携プレイ型』は、比較的人数が多いクラスでもゲームが実施できることや、仲間と連携する協力的な場面が必須なことから、体育の授業では多くの実践がなされている」（岸　2011）と述べている。一方で、関野は「ゲームを構成する個々の技能が難しい」（関野　2013　p.38）といった指摘もしている。

（２）バレーボールの楽しさについて

体育の授業における楽しさについては、「運動の特性に触れることができたか」と、その運動の持つ特性から論じられることが多々ある。

杉山らは、バレーボールの機能的特性（生徒から見た運動のよさ）について、「バレーボールとは，ボールを媒介として，集団対集団での攻防を繰り返しながら，点を取り合って勝敗を競い合うことが楽しい運動である。また，生徒一人ひとりがそれぞれのよさを生かして互いに教え合ったり，支え合ったりしながら自発的・自主的に学習を進めることや，技能や体力の向上に応じたゲームの質的な高まりに楽しさや喜びを味わうことができる運動である。さらに，チームワークの高まりによっては，ふだん以上の能力を発揮することができ，チームの課題を解決したり，ゲームに勝った時などにより大きな楽しさや喜びを味わうことができる。」（杉山他　2001）と述べている。

このことを踏まえ、本研究におけるバレーボールの楽しさをチームワークや共生に関わるものとして、表１のようにした。

表１　バレーボールの楽しさ

ア　チームでボールをつなぎ、ラリーを続けたり点を取り合うこと
イ　生徒一人ひとりがそれぞれのよさを生かして互いに教え合ったり、支え合ったりしながら活動すること

（３）授業におけるバレーボールのルールについて

前述の、バレーボールの楽しさ（p. ４表１参照）を生徒たちに味わわせることができるようにするための工夫として、生徒の実態に応じたルールを設定することが考えられる。

岩田は、１チーム３人のメンバー構成で、個々のプレイヤーが必ず１回ずつ関与する「３回触球制」のルールについて、「プレイヤー全てに連携プレイの役割行動への実質的な関与を促し、役割行動に向けた判断行為に参加することを意味している」また、「『意図的なセットを経由した攻撃』についてイメージを子どもたちに増幅・共有させ、それを成立させることに向けてのコミュニケーションを増大させていくことにあると言って良い」（岩田 2016　p. 47）と述べている。これらのことから、本研究では、３人制で、個々のプレイヤーが必ず１回ずつ関与する「３回触球制」をバレーボールのルールのベースとして取り入れることとした。また、正規のバレーボールのコートでは３人でプレイするには広いため、３人のプレイの連携がしやすくなるよう、コートはバドミントンコートで行うこととした。なお、１チーム６人をベースとし、その中で３人組を二つ作ることとし、３人組を「トリオ」、６人組を「チーム」、二つのトリオ双方の関係を「兄弟チーム」と呼び、「トリオ」の課題解決の学習において、もう一方の「トリオ」が協力しながら、「チーム」で課題解決を図るようにした。

また、関野は、バレーボールの特性として、ラリーの中でボールを止めたり、保持したりすることができず、飛んできたボールが自分のところに向かってくる時には、そのボールを飛ばす方向を考えてプレイしなければならないことを挙げ、「バレーボールのように個々の技能が難しく、正式なルールではゲームが複雑になり、混乱や理解の差がゲームの質を低下させ、ゲームを楽しむことができなくなるおそれのある種目では、それが持つ運動としての特性を生かしつつ、打ったり拾ったりというダイナミックな動きを習得させながら、いかにしてそれぞれの段階でゲームを楽しませるような工夫ができるかが重要である」（関野 2013　p. 38）と述べている。

このことを踏まえて、ボール操作の難しさを緩和するためや、ボール操作までの時間的余裕を作るために、ボールを一度、床に弾ませてから操作する「ワンバウンド可」というルールを取り入れていくこととした。

（４）「誰もがバレーボールを楽しむこと」と「チームワークを高めること」について

「要領」では、内容の取扱いについての配慮事項として、「体力や技能の程度，性別や障害の有無等に関わらず，運動の多様な楽しみ方を共有することができるよう留意すること」と示されている。また、このことについて『解説』では、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成に向けて、体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるようにすることが重要であること」（文部科学省　2018　p. 21）と示されている。このことから、体力や技能の程度などに関わらず、誰もが楽しさを味わうことができるようにすることが重要であると考えられる。

しかし、授業実施前に授業実施クラスに行った実態調査では、体育の授業が「楽しい・どちらかというと楽しい」と答えた生徒は78%であったのに対して、22%の生徒が「どちらかというと楽しくない・楽しくない」と答え、一部の生徒は楽しさを味わえていなかった。

以上のことから、本研究では、「誰もがバレーボールを楽しむ」こととは、「技能の差等に関わらず、体育の授業に肯定的な生徒も、否定的な生徒も、全員がバレーボールを楽しむ」ことと意味付けることとした。

また、同調査では、「体育の授業で、みんなが楽しめるようにするためには、どんなことが大切だと思いますか」という質問に対して、81%の生徒が仲間との関わりに関する記述を回答しており、得意不得意に関わらず、体育の授業を楽しむために仲間との関わりが大切であると捉えていた。岩田は「運動の達成に向けて、仲間と息を合わせ、アイディアを交流し、支え合うといった社会的行動、つまり他者との関わりが運動の楽しさを増幅させる重要な側面になる」（岩田　2012　pp. 6‐7）と述べており、誰もがバレーボールを楽しむためには、バレーボールにおける仲間との関わり、つまりチームワークが重要な要素であると考えられる。

２　「共生の視点」について

（１）「共生」とは

「共生」とは、大辞泉では、「(1)共に同じ所で生活すること。(2)異種の生物が、相互に作用し合う状態で生活すること。相利共生と片利共生があり、寄生も含めることがある。」（小学館大辞泉編集部　2012a）と記されている。

「共生」という言葉は、もとは、「接近した場所で生活する生物種間の関係」について名づけられた、生態学の分野での言葉であるが、次第に、「自然界における共生」と「人間社会における共生」にまで拡大され、自然環境と人間との共生、国際経済と日本経済の共生、さらには、教育・福祉における障がい児・者と健常児・者との共生など、現在では、あらゆる領域にわたって論議されるようになった（真鍋　2004）。

（２）共生社会にむけて

平成 17 年中央教育審議会の「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」では、「我が国が目指すべき社会は、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会である」（中央教育審議会　2005）として、今後の目指すべき社会の姿として共生社会を示している。

また、諏訪らは、このような共生社会における人間形成について「世界（社会）がつながり，関連性をもって成り立っていることを認識し，さまざまな民族が共存・共生する社会において，多様な文化・価値観などの差異を調整・調和し，また活用し，相手の立場や心情に共感し，イメージでき，利害の対立等の困難さをなんとか克服し，その過程で自己成長・変革しつつ，持続可能な地球社会を構築し，発展させる資質・能力，技能をもった主体的行動力をもつ人間」（諏訪他　2020）と定義している。こうしたことから、これから目指すべき共生社会を形成していくために、これらの資質・能力や行動力を持ち、また、それらを高めていくことが重要であり、教育をはじめ、社会のあらゆる面での取組が求められているものと考えられる。

（３）学校教育及び保健体育科における共生について

平成 28 年中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下、「答申」）では、「一人一人の子供たちが、障害の有無やその他の個々の違いを認め合いながら共に学ぶことを追求することは、誰もが生き生きと活躍できる社会を形成していくことでもある」（中央教育審議会　2016　p. 18）と共生社会を形成するために、学校教育の重要性が示されている。

また、「答申」において、「グローバル化など社会の急激な変化の中で、多様な人々が共に生きる社会の実現を目指し、一人一人が、多様性を尊重し、協働して生活していくことができるよう、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』と関連付けながら、学校の教育活動全体での一層の推進を図ることが求められる」（中央教育審議会　2016　p. 59）と示され、学校の教育活動全体においても共生の視点に立った教育の推進が求められた。

この度の「要領」の改訂にあたり、「答申」の趣旨を踏まえて、「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する観点から，体力や技能の程度，性別や障害の有無等にかかわらず，運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際，共生の視点を重視して改善を図ること。」（文部科学省　2018　p. 10）などの改訂の方針が示され、「要領」において、体育分野（球技）の内容として、第１学年及び第２学年では、「一人一人の違いを認めようとする」、第３学年では、「一人一人の違いに応じたプレイなどを大切にしようとする」と新たに共生の視点が示された。このことについて『解説』では、それぞれ、「体力や技能の程度，性別や障害の有無等にかかわらず，人には違いがあることに気付き，その違いを可能性として捉え，互いに認めようとすることに積極的な意思もつことが大切であること」、「体力や技能の程度，性別や障害の有無等にかかわらず，人には違いがあることに配慮し，よりよい環境づくりや活動につなげようとすることに自主的に取り組もうとする意思をもつことが大切であること」（文部科学省　2018　p. 40）と示された。

こうした社会や学校教育の動向から、共生の視点を重視して、体力や技能の程度、性別等に関わらず、個々の違いを認め合いながら共に学ぶことが求められており、教科保健体育の授業においても、それを実践していくことが重要である。

（４）「誰もがバレーボールを楽しむ」ための「共生の視点」について

前述（ｐ．６－１（４））のとおり、本研究では、「誰もがバレーボールを楽しむ」ことを「技能の差等に関わらず、体育の授業に肯定的な生徒も、否定的な生徒も、全員がバレーボールを楽しむ」こととしており、共生の視点として、「人には違いがあることに気付き、違いを認め合い、相手の気持ちに共感したり、相手を思いやったりし、それらを行動や言葉掛けで表すこと」とし、表２①～④のとおり整理した。

表２①～③については、「気付く」「共感する」「思いやる」といった心情的な面、④はそれらに基づいた意思的な面を表している。

授業実施前に授業実施クラスを対象に行った実態調査において、「体育の授業で、みんなが楽しめるようにするためには、どんなことが大切だと思いますか」という質問に対して、表２にあるように、共生に関わる記述が多数あった。

表２　本研究における共生の視点

【誰もが運動やスポーツを楽しむための共生の視点】

①人には違いがあることに気付く
②違いを認め合い、相手の気持ちに共感する
③相手を思いやる
→④思うようにいかないことも前向きに乗り越えるために、気付き、共感し、思いやりを行動や言葉掛けで示そうとする意思を持ち、それらを表す

【実態調査に対する生徒の記述】

みんなが楽しめるようにするためには・・・

・助け合い
・失敗を責めないこと
・できる人だけが活躍するのではなく、教え合い、みんなが活躍できるようにすること
・相手を思った発言や話し方で、一人をつくらないこと　　など

このように、生徒の実態調査からは、本研究テーマである「誰もが楽しむことができるバレーボール授業」のために、共生の視点を踏まえた行動や言葉掛けをしようとする意思がすでに感じられる生徒もいるが、誰もが楽しむことができるためには、全ての生徒に、保健体育科の「見方・考え方」と関連付けながら、「共生の視点」を重視した指導を行うことが重要であると考える。

３　チームワークの高まりと共生の視点について

大辞泉では、チームワークとは、「チームの成員が協力して行動するための、チーム内の団結や連係。また、そのような協力態勢」（小学館大辞泉編集部　2012b）と記されている。

また、ミドゥラらは、「チームワークとは，競争を課題にしながらチームのメンバーが協力し合ったり，強い絆で結ばれることを意味する」（ミドゥラ他　2000）と述べている。

このように、チームワークという言葉からは、協力やつながりといったことが意味合いとして考えられる。

チームワークを高めるためには、従前からの「態度」の指導事項である協力や参画について指導することが大切だと考えられるが、よりチームワークを高めるためには、新たに示された、一人ひとりの違いを認め合うといった「共生」の視点を重視することが大変重要であると考える。

三崎は、一人も見捨てないことを大切にした授業をすることについて、子ども同士の関わり合いが活発になり、人間関係が改善され、コミュニケーションが豊かになると述べている（三崎　2014）。また、『解説』の、球技（第１学年及び第２学年）の「学びに向かう力、人間性等」における共生の指導内容に「一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとすること」（文部科学省　2018　p. 129）と例示されている。このことから、授業において、一人ひとりの違いを認め合うという共生の視点を、学習内容として押さえて指導することで、生徒同士の関わり合いが活発になり、バレーボールにおいてはチーム内の人間関係が改善され、コミュニケーションが豊かになり、結果的にチームワークが高まることが期待できると考える。

これらのことから、「共生」の視点を重視することにより、積極的に仲間の学習を援助すること（協力）や、一人ひとりが進んで思いや考えを伝え合うこと(参画)が効果的に実践され、その結果、チームワークをより高めるものと考え、本研究では、チームワークを高めるために、「共生」の視点を重視し、併せて協力、参画も指導することとした。

４　共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習について

『解説』では、前述のとおり、共生に関わる内容について「様々な違いを超えて，参加者全員が楽しんだり達成感を味わったりするための工夫や調整が求められる場合があることなどを理解し，取り組めるようにする」（文部科学省　2018　p. 128）と、誰もが楽しむためには、共生について、その意義を理解することだけではなく、取り組めるようにすることが重要であることが示されている。

また、小沢らは「発問とは、知識の習得以上の活用というレベルまで、児童生徒を導こうとする教師の働きかけであると捉えることができる」(小沢他　2018)と述べている。さらに、小林は、「子どもの経験を媒介にして、彼らがそれを再構成し、新たな知見を得ること、その知識獲得の過程そのものを学ばせたいと考えた時に発問は必要になってくる。単に教師から与えられた知識よりも、自ら模索し、考えて結論に到達したものの方がより確実に身につくからである。」（小林　1995）と述べている。

これらのことから、チームワークを高めるためには、生徒自ら何が必要かを考え理解し、行動や言葉掛けとして表すことができるようにさせるために、発問が重要であると考えられる。

また、発問により気付きを促した上で、それに伴った学習活動を取り入れることにより、その気付きや理解を深め、その結果、チームワークを高めるための行動や言葉掛けを、より増やすことができると考える。

これらを踏まえ、チームワークを高め、誰もが楽しむために、前述のグリフィンらが提唱する、ゲームの振返りから、「どうすればパスがつながるか」といった発問を通して、何を練習すればよいのかを自覚させ、技術・戦術的な課題解決を図るという戦術アプローチ（グリフィン他　1999　pp. 14-15）の学習過程を活用し、共生の視点に基づいた発問から、仲間と関わる上で大切にすることや、誰もがバレーボールを楽しむために大切なことなどを考え、チームで大切にすることについて話し合ったり、互いの違いを認め、良いところを伝え合ったりするなど、仲間との関わり方について考える学習を通して、共生・協力・参画の必要性について、気付きを促し、それらを行動や言葉掛けとして表すことができるようになることを目指した。その中でも特に、一人ひとりの違いを認め合い、それぞれが持っている力を発揮することが、チームワークを高めるために大切であると考え、「共生」の視点を重視することとした。

５　形成的授業評価について

高橋らは、「各時間の授業実践を形成的に評価し，当初の計画を修正したり，個々の児童生徒の学びの実態を把握することは，授業成果を高めるうえできわめて重要である」（高橋他2003）と述べ、「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の４次元９項目からなる形成的授業評価票と診断基準を作成した。

そこで本研究でも、生徒が毎時間の授業をどのように捉えたかを把握し、次時の授業改善を図るために、高橋が作成した形成的授業評価に加筆・変更を行ったものを使用し実施することとした（表３）。生徒は毎時間、個人カードで９項目を「はい」「どちらでもない」「いいえ」の３段階で自己評価し、「はい」を３点、「どちらでもない」を２点、「いいえ」を１点とし、平均点を算出した。さらに、９項目の総合平均点と次元ごとの平均点を高橋が定めた診断基準（表４）に照らして５段階評価することとした。

表３　形成的授業評価票（　　は必要に応じて、加筆・変更を行った部分である）

		はい	どちらでもない	いいえ
1	深く心に残ることや、感動することがありましたか。			
	１で「はい」と答えた人に聞きます。それは具体的にどんなことですか。			
2	今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか。			
3	「あっ、わかった！」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。			
4	せいいっぱい、全力をつくして運動することができましたか。			
5	楽しかったですか。			
	５で「はい」と答えた人に聞きます。それはなぜですか。			
6	自分から進んで学習することができましたか。			
7	自分の目標に向かって、何回も練習できましたか。			
8	友だちと協力して、なかよく学習できましたか。			
9	友だちとお互いに教えたり、助けたりしましたか。			

表４　形成的授業評価診断基準（　　は必要に応じて、加筆・変更を行った部分である）

次元	項目＼評定	5	4	3	2	1
成果	１．感動の体験	3.00～2.62	2.61～2.29	2.28～1.90	1.89～1.57	1.56～1.00
	２．技能の伸び	3.00～2.82	2.81～2.54	2.53～2.21	2.20～1.93	1.92～1.00
	３．新しい発見	3.00～2.85	2.84～2.59	2.58～2.28	2.27～2.02	2.01～1.00
	次元の評価	3.00～2.70	2.69～2.45	2.44～2.15	2.14～1.91	1.90～1.00
意欲・関心	４．せいいっぱいの運動	3.00	2.99～2.80	2.79～2.56	2.55～2.37	2.36～1.00
	５．楽しさの体験	3.00	2.99～2.85	2.84～2.60	2.59～2.39	2.38～1.00
	次元の評価	3.00	2.99～2.81	2.80～2.59	2.58～2.41	2.40～1.00
学び方	６．自主的学習	3.00～2.77	2.76～2.52	2.51～2.23	2.22～1.99	1.98～1.00
	７．目標をもった学習	3.00～2.94	2.93～2.65	2.64～2.31	2.30～2.03	2.02～1.00
	次元の評価	3.00～2.81	2.80～2.57	2.56～2.29	2.28～2.05	2.04～1.00
協力	８．なかよく学習	3.00～2.92	2.91～2.71	2.70～2.46	2.45～2.25	2.24～1.00
	９．協力的学習	3.00～2.83	2.82～2.55	2.54～2.24	2.23～1.97	1.96～1.00
	次元の評価	3.00～2.85	2.84～2.62	2.61～2.36	2.35～2.13	2.12～1.00
総合評価（総平均）		3.00～2.77	2.76～2.58	2.57～2.34	2.33～2.15	2.14～1.00

６　仲間づくり調査票について

小松崎らは、「人間関係，仲間づくりに焦点化した体育授業がふたたび注目されるようになってきた。このような課題を学習理念ではなく，確実な成果として実現するためには，仲間づくりに焦点をあててアセスメントする必要がある。」（小松崎ら　2003　p. 16）と述べ、「集団的相互作用」「集団活動への意欲」「集団的人間関係」「集団的思考」「集団的達成」の５因子10 項目からなる仲間づくり調査票を作成した。

そこで本研究でも、この仲間づくり調査票（表５）を使用し、仲間づくりに焦点を当てた形成的評価を実施することとした。

生徒は毎時間、個人カードで 10 項目を「はい」「どちらでもない」「いいえ」の３段階で自己評価し、「はい」を３点、「どちらでもない」を２点、「いいえ」を１点とし、平均点を算出した。

そして、小松崎らは、「少なくとも 2.5 点以上の平均得点を得ていることが授業成果のめやすと判断される。平均得点が２点を下回るようならば，子どもたちは『もの足りなかった』『あまり協力できなかった』という印象を持っていると考えられ，得点を低下させた何らかの要因が授業中にあったと見るべきである。」（小松崎他　2003　p. 19）と述べている。

表５　仲間づくり調査票

体育授業についての調査　／

今日の体育の授業について質問します。次の１から 10 の質問に対して、あなたはどのように思いましたか。
自分の気持ちに一番近い答えに〇をつけてください。

１．あなたのグループは、今日課題にしたことを解決することができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
２．あなたは、グループのみんなで成しとげたという満足感を味わうことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
３．あなたのグループは、友だちの意見に耳を傾けて聞くことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
４．あなたのグループは、課題の解決に向けて積極的に意見を出しあうことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
５．あなたは、グループの友だちを補助したり、助言したりして助けることができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
６．あなたは、グループの友だちをほめたり、励ましたりしましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
７．あなたは、グループがひとつになったように感じましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
８．あなたは、グループのみんなに支えられているように感じましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
９．あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員で楽しむことができましたか。	はい	どちらでもない	いいえ
10．あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員でもっとやってみたいと思いますか。	はい	どちらでもない	いいえ

第３章　検証授業

１　検証授業

（１）期間

令和３年８月 31 日（火）～９月 17 日（金）

（２）場所

神奈川県横須賀市立常葉中学校　体育館

（３）授業者

神奈川県横須賀市立常葉中学校　教諭　井澤祐貴（筆者）

（４）対象者

第２学年１クラス 34 名

※バレーボール部に所属している生徒は１名のみであり、実態調査の結果から約７割の生徒がバレーボールに対して苦手意識を持っている。

（５）単元名

球技：ネット型「バレーボール」

２　検証方法

（１）主なデータ収集方法

ア　アンケート調査

（ア）実態調査アンケート　７月 15 日（木）

（イ）事前アンケート　８月 30 日（月）

（ウ）事後アンケート　９月 22 日（水）

イ　個人カード

ウ　授業の様子を記録した映像

毎時間、ビデオカメラにより学習の展開及び生徒の様子を撮影した。図１の１、２、３は、体育指導センター所員及び検証授業実施校の職員が移動しながら撮影し、ゲーム時は体育館２階ギャラリーの４、５、６の位置に固定し撮影した。

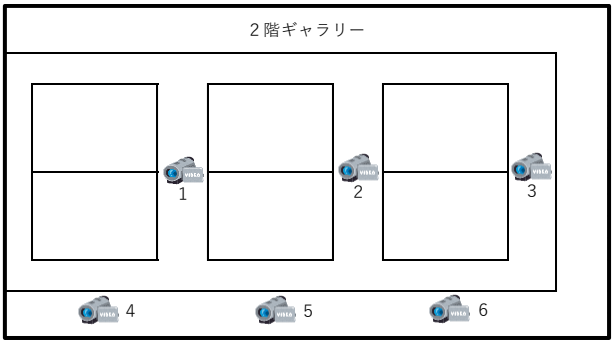


図１　ビデオカメラ配置図

（２）研究の仮説、検証の視点と方法

【研究の仮説】

第２学年球技（ネット型「バレーボール」）において、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、チームワークが高まり、誰もがバレーボールを楽しむことができるであろう。

【検証の視点と方法】

仮説に基づいて、次の四つの検証の視点を設定した。

ア　生徒は授業をどのように捉えたか

イ　生徒は共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習をどのように捉えたか

ウ　チームワークは高まったか

エ　誰もがバレーボールを楽しむことができたか

なお、具体的な内容については以下のとおりである。

ア　生徒は授業をどのように捉えたか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等	
（ア）生徒は毎時間の授業をどのように捉えたか	個人学習カード（形成的授業評価〈３件法の回答〉【高橋2003】）	成果	深く心に残ることや、感動することがありましたか。
			「はい」と答えた人に聞きます。それは具体的にどのようなことですか。（自由記述）
			今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか。
			「あっ、わかった!」とか、「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。
		意欲・関心	せいいっぱい、全力をつくして運動することができましたか。
			楽しかったですか。
			「はい」と答えた人に聞きます。それはなぜですか。（自由記述）
		学び方	自分から進んで学習することができましたか。
			自分の目標に向かって何回も練習できましたか。
		協力	友だちと協力して、なかよく学習できましたか。
			友だちとお互いに教えたり、助けたりしましたか。
（イ）バレーボールの単元を生徒はどのように捉えたか	事後アンケート	「今回のバレーボールの授業の感想を書いてください」（自由記述）	

＊　　は加筆・修正した部分。

イ　生徒は共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習をどのように捉えたか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等
（ア）生徒は共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習をどのように捉えたか	事後アンケート	チームワークに関わる発問や活動を通して、仲間との活動において共生の意識をもつことの大切さに気付くことができましたか。（４件法の回答）
		チームワークに関わる発問や活動を通して、仲間との活動において協力することの大切さに気付くことができましたか。（４件法の回答）
		チームワークに関わる発問や活動を通して、話し合い活動等に積極的に参画することの大切さに気付くことができましたか。（４件法の回答）
		発問や活動を通して、チームワークについて考える機会がたくさんありました。このような授業の流れは、チームワークを高めるうえで有効でしたか。（４件法の回答）
		チームワークルールの作成や、それを確認することは、チームワークを高めるうえで有効でしたか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
		仲間の良いところを、個人カードに書いて伝える認め合い活動は、チームワークを高めるうえで有効でしたか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
		誰もが楽しむための試合での方針を考える活動は、チームワークを高めるうえで有効でしたか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）

ウ　チームワークは高まったか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等
（ア）共生の意欲が行動として表れたか	事前・事後アンケート	体力や技能の程度、性別や障害の有無等の一人ひとりの違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動などができましたか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
（イ）協力の意欲が行動として表れたか	事前・事後アンケート	練習の際に、球出しなどの補助をしたり、課題の解決に向けて仲間をサポートしたりすることができましたか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
（ウ）参画の意欲が行動として表れたか	事前・事後アンケート	課題の解決に向けて話し合う場面で、自らの考えを述べるなど積極的に話し合いに参加することができましたか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
（エ）チームワークの高まりを感じることができたか	事後アンケート	今回の 10 時間の授業で、自分たちのチームのチームワークは向上したと思いますか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
		チームワークの向上のために心がけたことがあれば書いてください。（自由記述）
		授業全体を通じて、チームワークの向上のために仲間が取り組んでいたことで、特によかったことを記載してください。（自由記述）

具体的な視点	手がかり	内容・方法等	
（オ）仲間づくりの成果	個人カード（仲間づくり調査票〈３件法の回答〉【小松崎他2003】）	集団的達成	あなたのグループは、今日課題にしたことを解決することができましたか。
			あなたは、グループのみんなで成しとげたという満足感を味わうことができましたか。
		集団的思考	あなたのグループは、友だちの意見に耳を傾けて聞くことができましたか。
			あなたのグループは、課題の解決に向けて積極的に意見を出しあうことができましたか。
		集団的相互作用	あなたは、グループの友だちを補助したり、助言したりして助けることができましたか。
			あなたは、グループの友だちをほめたり、励ましたりしましたか。
		集団的人間関係	あなたは、グループがひとつになったように感じましたか。
			あなたは、グループのみんなに支えられているように感じましたか。
		集団的活動への意欲	あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員で楽しむことができましたか。
			あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員でもっとやってみたいと思いますか。

エ　誰もがバレーボールを楽しむことができたか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等
（ア）自分自身がバレーボールの楽しさを味わうことができたか	事前・事後アンケート	今回のバレーボールの授業は楽しみにしていますか。（楽しかったですか。）（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
	個人カード	今日、感じたことや学んだこと。（自由記述）
（イ）仲間がバレーボールの楽しさを味わうことができたか	事後アンケート	チームの自分以外の仲間全員が、バレーボールを楽しむことができたと思いますか。（４件法の回答）
		そのように考えた理由は何ですか。（自由記述）
（ウ）バレーボールを楽しむために大切な要素についての認識	事前・事後アンケート	みんながバレーボールを楽しむために、大切なことは何だと思いますか。あなたの考えを自由に書いてください。（自由記述）

３　学習指導計画

（１）単元の目標

ア	知識及び技能 次の運動について，勝敗を競う楽しさや喜びを味わい，バレーボールの特性や成り立ち，技術の名称や行い方，その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに，基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開できるようにする。 バレーボールにおいて，ボールの操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすることができるようにする。
イ	思考力，判断力，表現力等 攻防などの自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
ウ	学びに向かう力，人間性等 バレーボールに積極的に取り組むとともに，フェアなプレイを守ろうとすること，作戦などについての話合いに参加しようとすること，一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること，仲間の学習を援助しようとすることなどや，健康・安全に気を配ることができるようにする。

（「要領」の内容をもとに設定）

（２）評価の観点及び趣旨

体育分野　第１学年及び第２学年

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	各運動の特性や成り立ち，技の名称や行い方，伝統的な考え方，各領域に関連して高まる体力，健康・安全の留意点についての具体的な方法及び運動やスポーツの多様性，運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方についての考え方を理解しているとともに，各領域の運動の特性に応じた基本的な技能を身に付けている。	運動を豊かに実践するための自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて，課題に応じた運動の取り組み方や目的に応じた運動の組み合わせ方を工夫しているとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう，公正，協力，責任，共生などに対する意欲をもち，健康・安全に留意して，学習に積極的に取り組もうとしている。

（文部科学省　2019）

（３）内容のまとまりごとの評価規準

体育分野　第１学年及び第２学年　Ｅ　球技（ネット型のみ記載）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 ・球技の特性や成り立ち，技術の名称や行い方，その運動に関連して高まる体力などについて理解している。 ○技能 ・ネット型では，ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすることができる。	・攻防などの自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	・球技に積極的に取り組むとともに，フェアなプレイを守ろうとすること，作戦などについての話合いに参加しようとすること，一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること，仲間の学習を援助しようとすることなどをしたり，健康・安全に気を配ったりしている。

（国立教育政策研究所　2020）

（４）単元の評価規準（球技：ネット型「バレーボール」）

知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 ①球技には，集団対集団，個人対個人で攻防を展開し，勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて，言ったり書き出したりしている。 ②球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり，それらを身に付けるためのポイントがあることについて，言ったり書き出したりしている。	○技能 ①味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができる。 ②プレイを開始するときは，各ポジションの定位置に戻ることができる。	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に，仲間の課題や出来映えを伝えている。 ②体力や技能の程度，性別等の違いを踏まえて，仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け，仲間に伝えている。	①作戦などについての話し合いに参加しようとしている。 ②一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとしている。 ③練習の補助をしたり仲間に助言したりして，仲間の学習を援助しようとしている。

（「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校保健体育】をもとに設定）

（５）単元の概要

40 分授業				
時間 （日付）	1 （８／31）	2 （９／１）	3 （９／２）	4 （９／３）
学習 内容	バレーボールについて知り積極的に取り組もう。	パスの仕方を学び、パスができるようになろう。	パスの仕方を学び、パスができるようになろう。	ラリーが続けられるようパス技能を向上させよう。
	挨拶 出欠席の確認 本時の確認	準備運動・挨拶 出欠席の確認 本時の確認	準備運動・ドリルゲーム・挨拶 出欠席の確認 本時の確認	
5	**オリエンテーション** ○学習カード配付 ○単元、バレーボールの説明	**発問③**チームワークを高めるために、どのような行動が大切ですか？	**発問③**チームワークを高めるために、どのような行動が大切ですか？	**チームワークルールの確認**
10	**準備運動** ○リズムジャンプ ○ボールを使った運動（直上オーバーハンドパス）	**チームワークルールの作成** ○個人で考える →チームで作成	**チームワークルールの確認** ○前時に作ったルールを再確認する	**個人カードの仲間の良かった行動の記述を紹介**
15	**試しのゲーム** ・３対３ ・１試合３分 ・サーブ投げ入れ可 ・１ラリー１バウンド可 ・ローテーションなし ・サーブは順番に ・ジャンプスパイク禁止	**基本技能の習得** ○チームでアンダーハンドパスの練習 ・二人組対面パス **ドリルゲーム** ○対面アンダーハンドパス ・ネットを挟んで行う	**基本技能の習得** ○アンダーハンドパスの復習 ・片手で直上トス ・両手で直上トス ・対面パス ○オーバーハンドパスの練習（二人組） ・直上キャッチ ・対面キャッチ ・対面パス **ドリルゲーム** ○対面オーバーハンドパス ・ネットを挟んで行う	*発問ゲームでいかせるパスができるようになりましたか？* **基本技能の習得** ○対面パス ・コートに入らないチームは、空いているところで対面パスを行う ○三角パス ・コートの反面を使って三角パスを行う
20				
25				**ラリーゲーム** ・他チームと行う ・ワンバウンド可 ・ネットより高いボールでつなぐ ・必ず全員でつなぐ
30	*発問①誰もがバレーボールを楽しむためには、何が大切ですか？* *発問ボールをつなぐためには何が必要ですか？*			
35	**発問②**チームワークとは何ですか？			
40	**本時のまとめ** ○振返り ○個人カード記入 ○次時の確認			

指導・評価						
知・技	知	①◎		②◎	
	技		①○		
思・判・表					
主体的態度		①②○			

○：指導日　●：評価日　◎：指導日＋評価日

＊**発問**の*斜体*は技術や戦術に関わるもの。　　は共生の視点を重視した発問。*斜体*は双方に関わる発問。なお、共生の視点を重視した発問は丸数字で示し、詳細はｐ.22 表６参照。

＊指導・評価の①～③はｐ.19 を参照。

50分授業						
時間 （日付）	5 （９／６）	6 （９／７）	7 （９／13）	8 （９／14）	9 （９／16）	10 （９／17）
学習 内容	ボールを持たないときの動きを身に付けよう。	違いを認め合いながら、仲間につながるパスを出せるようになろう。	話し合いを通し、チームの課題を認識しよう。	チームで支え合い、課題を解決しよう。	チームで支え合い、課題を解決しよう。	誰もが楽しむことができるための方針を決め、ゲームを楽しもう。
	準備運動・挨拶 出欠席の確認・本時の確認		チームワークルールの確認・準備運動・挨拶 出欠席の確認・本時の確認			
5 10 15 20 25 30 35 40 45 50	*発問④得意不得意を踏まえてどのようなフォーメーションだと、ボールがつながりやすいですか？* **フォーメーションについての確認** ○写真を見て隊形の分析 ○フォーメーションを考える ・作戦ボードを使用 **ボールを持たないときの動きの説明** **課題解決の練習** ○つないで返球！練習 ・投げられたボールを３人でつないで返す	*発問アンダーハンドパスとオーバーハンドパスを、どのように使い分けていますか？* **課題解決の練習** ○１対２斜めパス ・アンダーハンドパス ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパスとオーバーハンドパスの使い分け	**メインゲームのルールの確認** *発問パスがつながるときとつながらないときは、何が違いますか？* **映像分析** ○前時のラリーゲームを基にボールがつながるときとつながらないときの違いを分析する **課題解決の練習** ○今まで取り組んだ練習や、自分たちで考えた練習に取り組む	**課題解決の練習** ○つないで返球！練習 ・自コートから投げられたボールをつなぎ返球する ・相手コートから投げられたボールをワンバウンドでレシーブし、３人でつなぎ返球する ○空いているスペースで今まで行った練習に取り組む	*発問⑥ゲーム中の声掛けで大切なことは何ですか？* *発問相手コートからくるボールを拾うことは難しいですか？* **課題解決の練習** ○つないで返球！練習 ・相手コートから投げられたボール ・兄弟チームでラリー ○空いているスペースで距離をとった対面パスをする **話合い** ○ポジショニングについて	*発問⑦誰もがゲームを楽しむために大切なことは何ですか？* **誰もがゲームを楽しむための方針づくり** **ゲームに向けての練習** ○チームで円陣パス **メインゲーム** ・ノーバウンドで３回→３点 ・ワンバウンドを使い３回→２点 ・４回以上→１点 ・２回以内→０点
	ラリーゲーム ・他チームと行う ・ワンバウンド可 ・ネットより高いボールでつなぐ ・必ず全員でつなぐ			**メインゲーム** ・ノーバウンドで３回→３点 ・ワンバウンドを使い３回→２点 ・４回以上→１点 ・２回以内→０点		
	本時のまとめ ○振返り ○個人カード記入 ○次時の確認	*発問⑤仲間の良いところはどこですか？* **認め合い活動** **本時のまとめ**	**本時のまとめ** ○振返り ○個人カード記入 ○次時の確認			**本時のまとめ** ○振返り ○個人カード記入

指導・評価							総括的な評価
知・技	知						
	技	②○			①●	②●	
思・判・表			①◎	②◎			
主体的態度		①●		③○	②●	③●	

評価方法			
知・技（知）	個人カード	知・技（技）	観察
思・判・表	個人カード・観察	主体的態度	観察

４　学習指導の工夫

（１）共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習について

ア　発問

本研究では、チームワークを高め、誰もがバレーボールを楽しむためには、共生、協力、参画の必要性に気付き、それらを行動や言葉掛けとして表すことができるようになることが重要であると考え、共生の視点を重視した発問（表６）を取り入れることとした。

表６　授業で実際にした共生の視点を重視した発問

	発問	ねらい
発問①	誰もがバレーボールを楽しむためには、何が大切ですか？	誰もが楽しむために、技能差等に配慮しながら、チームワークを高めることが重要であることに気付くこと
発問②	チームワークとは何ですか？	チームワークの要素には、「共生」「協力」「参画」があり、チームワークを高める上で、特に「共生」の視点が重要であることに気付くこと
発問③	チームワークを高めるために、どのような行動が大切ですか？	チームワークを高めるために、どのような行動をとることが大切かに気付くこと
発問④	得意不得意を踏まえて、どのようなフォーメーションだとボールがつながりやすいですか？	フォーメーションを考える際に、技能差を踏まえることが大切であることを理解すること
発問⑤	仲間の良いところはどこですか？	仲間の良いところを見つけて認め合い、共有すること
発問⑥	ゲーム中の声掛けで大切なことは何ですか？	仲間の良さや個性を理解した上での声掛けが大切であることを理解すること
発問⑦	誰もがゲームを楽しむために大切なことは何ですか？	誰もが楽しむために大切な行動等を共有し、実践すること

イ　学習活動

（ア）チームワークルールの作成・確認

１時間目の終わりと２時間目のはじめに、チームワークについて表７のように共生、協力、参画について説明をし、その後、チームワークを高めるためにチームとして大切にすることを話し合い、全チームとも共生に関わるものを一つと、協力や参画、もしくは、いずれにも分類されないものを一つ、それぞれチームワークルールとして作成した（図２・３）。

３時間目と４時間目には、作成したチームワークルールの確認と、必要に応じて追加・修正を行なった。５・６時間目は課題解決等の活動時間の確保のため、確認の時間等を設けなかったため、生徒たちの中にチームワークを意識した言動が少なかったように感じた。そのため、７時間目以降は、毎時間ウォーミングアップのリズムジャンプを行う前に確認をする時間を設けた（図４）。

＊当初の計画では、チームワークを高めるための手立てとして様々な活動を計画していたが、時間を掛けないとチームワークルールを作成した意義が生徒たちの中に浸透しないと考え、活動の数を絞り、チームワークルールの確認をメインの活動とした。

表７　チームワークについての説明

共生	一人ひとりの違いを認め合い、違いを超えて、共に助け合い、支え合い、高め合っていくこと※
協力	目標に向かって力を合わせること（球出し、アドバイスなど）
参画	話合いに参加するだけでなく、意見や考え、思いなどを伝えること

※共生の説明における「助け合い、支え合い、高め合っていく」という言葉は、『解説』の内容に当てはめると、協力に分類されるが、生徒が共生という言葉を理解しやすくするために、このような表現で説明した。

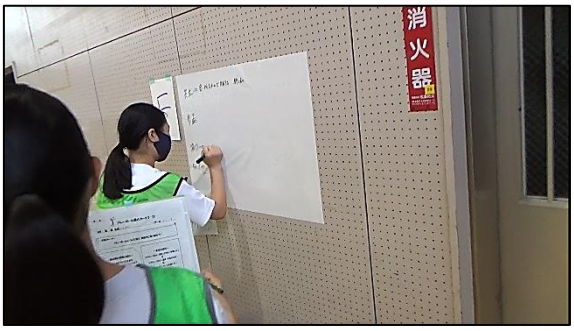


図２　チームワークルールを作成する様子

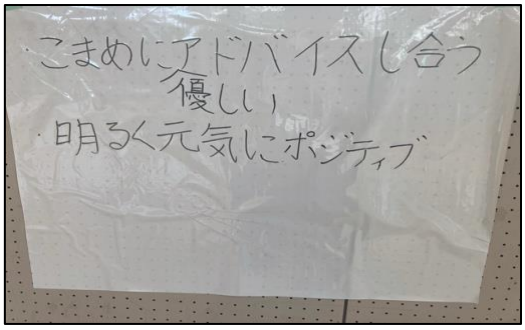


図３　作成されたチームワークルール

図４　チームワークルールを確認する様子

（イ）認め合い活動

６時間目に自分や仲間の良いところに気付き、互いを認め合うことができるよう、チームの仲間の良いところを個人カードに書いて伝え合う「認め合い活動」（図５）を行った。

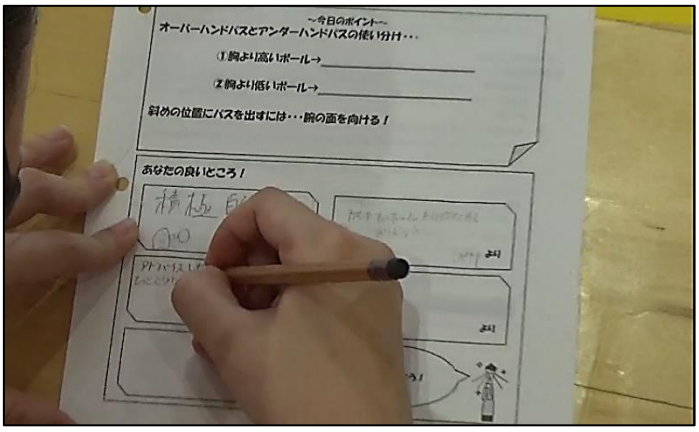


図５　認め合い活動

（ウ）誰もがゲームを楽しむための方針づくり

単元のまとめとして、10 時間目に、誰もがゲームを楽しむためにはどのようなことを意識してプレイや行動をすることが大切かを話し合い、チームごとの方針を考えさせた。そしてそれを、作戦ボードに記入した（図６）。

戦術などのプレイ面だけでなく、行動や言葉掛けも、技能の差等に配慮しながら考え実践していくことが大切であることを意識させた。

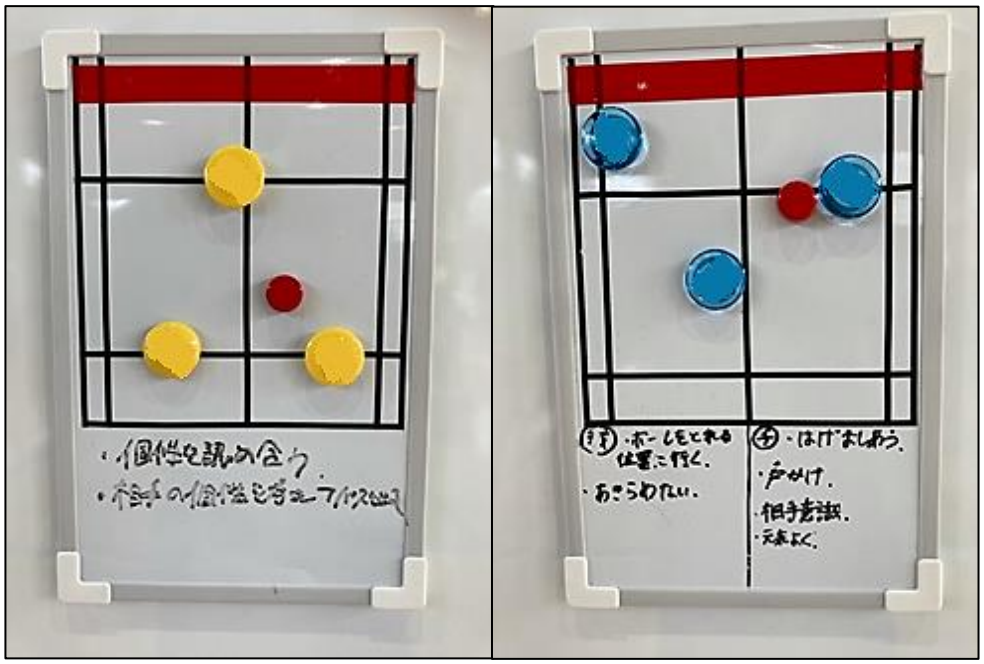


図６　生徒により考えられた、誰もがゲームを楽しむための方針

（２）その他

ア　チームの活動を高める工夫について

（ア）グループの組み方の工夫

岩田の理論（p. ５参照）を参考に本研究では、生徒同士のコミュニケーションをより増大するため、５人もしくは６人を１チームとし、計６チーム編成した。そして各チーム、３人組のトリオを二つ作り、学習を進めることとした。そして、双方のトリオを兄弟チームとし、互いに協力し合って練習やゲームに取り組めるようにした。なお、５人チームの場合は、二つのトリオに所属する生徒を１名設定することとした。

（イ）学習カードの工夫

本研究では、チームやトリオへの帰属意識を高めるため、チームやトリオに関わるものとして「トリオカード」を用意した。また、個人に関わるものは「個人カード」を使用し、毎時間、チームワークを高めるために仲間が取り組んでいてよかったことを記入する欄を設けた。さらに、トリオ用のファイルを用意し、その中に個人カードを入れ、トリオリーダーから配付するようにした（図７）。さらに、トリオファイルの裏表紙には、チームワークルールを記入する欄を設けた（図８）。

図７　トリオファイル

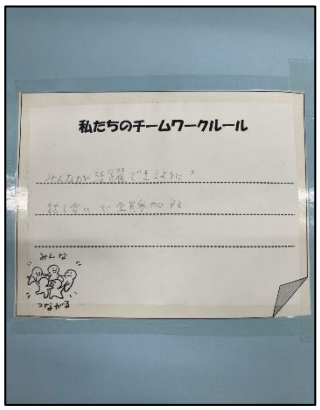


図８　トリオファイル裏表紙

（ウ）ウォーミングアップの工夫

本研究では、チームとしての意識を高めるために、チームごとにウォーミングアップを行うこととした。生徒たちは体育館に来たら、自分たちで準備をし、ウォーミングアップを行った。ウォーミングアップの流れが確認できるように、体育館ステージ上にプロジェクターで動画と説明を映す工夫も行った。

津田は、「並んで跳ぶことで一体感をつくることができること」や、「音楽に合わせていろいろな技を行うことが、運動好きの児童のみならず、運動に苦手意識を持っている児童にも楽しさを感じさせることができること」（津田　2013）を、リズムジャンプの効果として挙げている。

このことから、本研究では、チームのメンバーと並んで跳び、さらにみんなで手拍子をすることで、チームとしての一体感が高まり、誰もが少しでも楽しさを感じられるようになることをねらい、リズムジャンプをウォーミングアップに取り入れることとした（図９）。

また、単元後半では、よりチームとしての意識を高めるため、チームごとにチームワークルールの確認をしてからウォーミングアップを行うことにした。

図９　リズムジャンプに取り組む様子

イ　ゲームのルールについて

関野は、「バレーボールのように個々の技能が難しく、正式なルールではゲームが複雑になり、混乱や理解の差がゲームの質を低下させ、ゲームを楽しむことができなくなるおそれのある種目では、それが持つ運動としての特性を生かしつつ、打ったり拾ったりというダイナミックな動きを習得させながら、いかにしてそれぞれの段階でゲームを楽しませるような工夫ができるかが重要である」（関野　2013　p.38）と述べている。そのため、本研究でも、表８のように、各ゲームのルールの設定・修正を行った。

表８　本研究における各ゲームの概要

<table>
<tr><td></td><td>試しのゲーム
（１時間目）</td><td>ラリーゲーム
（４～６時間目）</td><td>メインゲーム
（８～10 時間目）</td></tr>
<tr><td>ねらい</td><td>工夫されたゲームに積極的に取組、楽しむことができるようにする。</td><td>３人でボールをつなぎ、相手コートに返球できるようにする。</td><td>３人でボールをつなぎ、ラリーを続けることができるようにする。</td></tr>
<tr><td>コート</td><td colspan="3">バドミントンコートを使用</td></tr>
<tr><td>ネットの高さ</td><td colspan="3">２ｍ</td></tr>
<tr><td>返球のルール</td><td colspan="2">必ず全員がボールに触れ３回で返球する</td><td>全員でつないでから
返球する
＊一人２回続けて
ボールに触れても良い</td></tr>
<tr><td>サービス</td><td>順番に打つ
（投げ入れも可）</td><td colspan="2">兄弟チームが自コートから投げる</td></tr>
<tr><td>サービス権</td><td colspan="3">１プレイごとにサービス権が移る</td></tr>
<tr><td>ローテーション</td><td colspan="3">なし</td></tr>
<tr><td>スパイク</td><td colspan="3">ジャンプスパイクは禁止</td></tr>
<tr><td>バウンド制</td><td>１ラリー（相手へ返球するまでの３タッチ）の中で１度だけワンバウンドさせることができる</td><td colspan="2">全員ワンバウンドをさせてから
ボールに触れてもよい</td></tr>
<tr><td>得点</td><td>バウンドありでの得点は１点、バウンドなしでの得点は２点</td><td>相手コートに返球することができたら１点</td><td>相手コートに返球するたびに得点が入る
・ノーバウンドで３回で返球→３点
・ワンバウンドを使い３回で返球→２点
・４回以上で返球→１点
・２回以内で返球→０点</td></tr>
<tr><td>勝敗</td><td colspan="3">兄弟チームとの合計で競う</td></tr>
</table>

＊当初、単元を通して同じルールでゲームを行う予定であったが、ほとんどの生徒がバレーボールを行うのが初めてだったことや感染症対策のための短縮授業などにより、当初の計画では、ラリーが続かずバレーボールの楽しさを生徒たちが十分味わうことができないと考え、単元途中で全員ワンバウンド可とした。それでもラリーが続かなかったため、相手コートへの返球をよりしやすくするために、８時間目以降では触球回数の制限もなくした。これらの変更により、バウンドや４回以上の触球を有効に活用するなどして３人でつないで返すことができるようになった。また、得点の入り方に差をつけることにより、高得点となるノーバウンドで３回で返すことに挑戦する姿もみられた。

ウ　場の工夫について

（ア）ネットを使わない練習場所の工夫

少しでもボールに触れる機会を増やすため、６チーム全てが同時に練習できるよう、基本の練習場所として各チームにバドミントンコートを半面ずつ割り当てた（８・９時間目以外）。そして、安全確保のため、同じコートを使っているチームとは背中合わせになるようにし、各チームが壁の方に向かって練習するようにした（図 10）。

また、その際にネットの高さをイメージしやすいよう、ネットと同じ高さになるよう、床から２ｍの高さの壁に赤いビニルテープを貼った（図 11）。

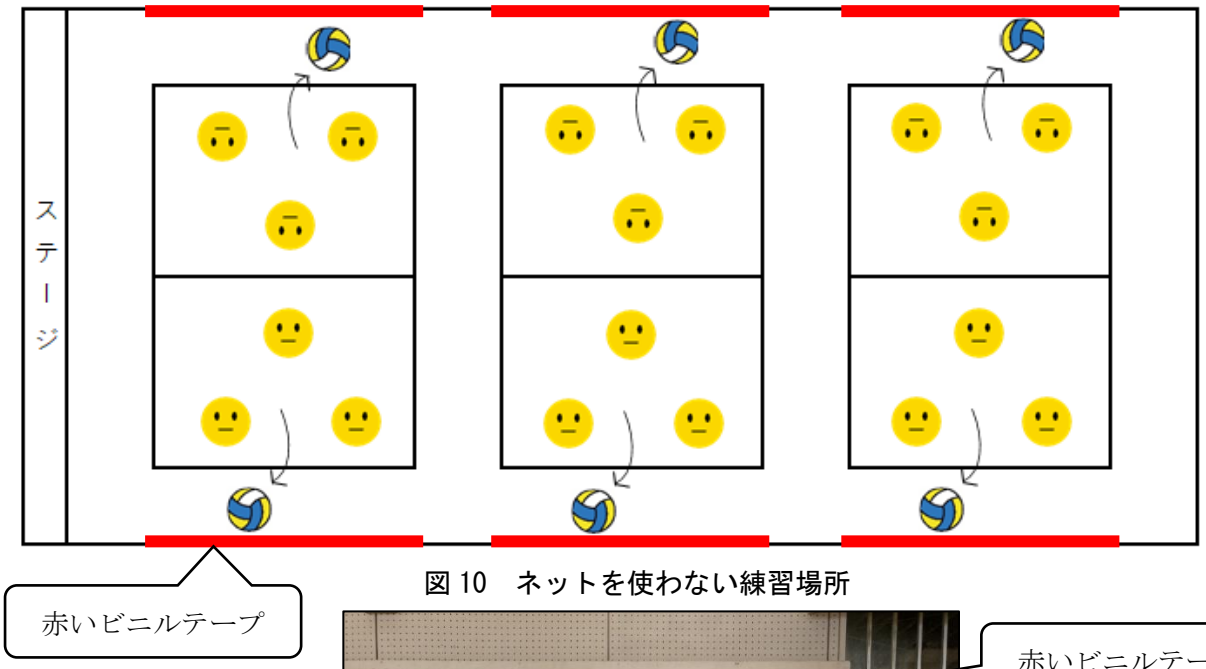


図 10　ネットを使わない練習場所

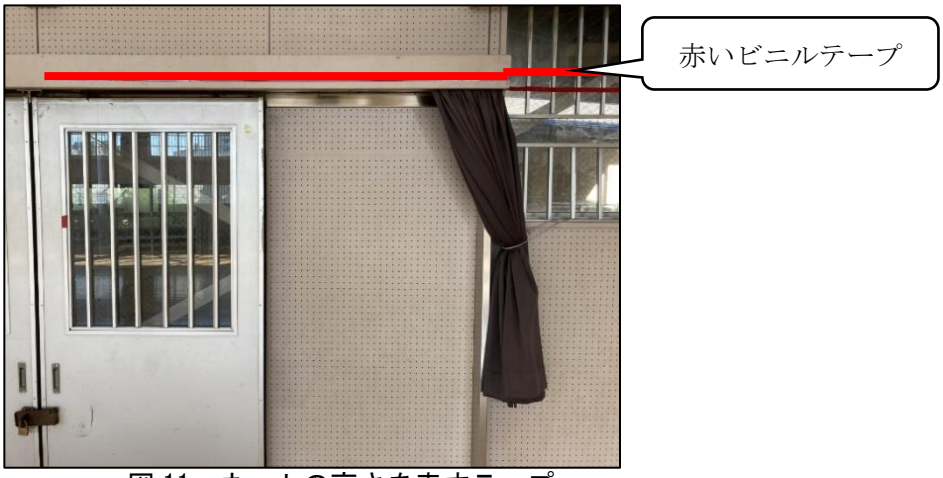


図 11　ネットの高さを表すテープ

（イ）ネットを使った練習の工夫

よりゲームに近い練習に取り組めるよう、８・９時間目の練習では、各チームがバドミントンコートを一面ずつ使い、ネットを挟んだ練習を設定した。検証授業で使用した体育館はバドミントンコートが３面しかないため、全チームが同時に使用することができない。このことからコートに入ることができないチームは、安全を確保し、コート外の空いている場所を使い練習に取り組めるようにした。

エ　教材・教具について

（ア）タブレット端末の活用

７時間目の授業で、各トリオに、自分たちの前時のゲームでの良いプレイとその他のプレイの動画の入ったタブレット端末を１台配付した。生徒たちは動画をもとに、良い時（パスがつながる時）と良くない時（パスがつながらない時）の違いについて話合いをし、課題を共有できるようにした（図 12）。

図 12　タブレットを活用した話合い

（イ）スライドの活用

発問の内容や技能的なポイント、授業の流れ等を生徒たちが理解しやすくなるよう、単元を通してスライドをステージ上に大きく映し授業を行った（図 13）。

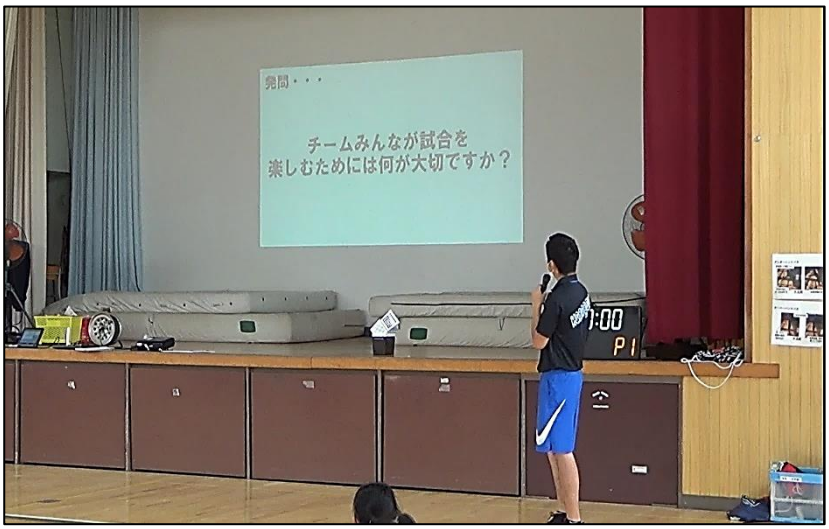


図 13　スライドを活用した授業の様子

（ウ）ボールの工夫

福原らは、子どもたちがボールを痛いと言って嫌がる（怖がる）など、ボールが原因で学習が停滞してしまうことがよくあり、子どもたちが安心して積極的にゲームに参加できるようにするため、適切なボールを使用する必要性を述べている（福原他　2005）。そこで本研究では、ボールへの恐怖心を和らげるため、重さや大きさは、正規のバレーボール４号とほぼ同じで、スポンジ製のバレーボール（４号）を使用した（図 14）。

図 14　本研究で使用したバレーボール（４号）

（エ）作戦ボードの活用

コートでのフォーメーションを考える際（５・９時間目）や、ゲームでの方針を考える際（10 時間目）に作戦ボードを活用した（図 15）。

また、作戦ボードのコート外に余白を設け、ゲームでの方針等、チームで話し合ったことを記入できるようにした。

図 15　作戦ボード

５　授業の実際

【本時の展開】（１／10 時間目）　８月 31 日（火）　２校時（９:40～10:20）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能（知識）①〉バレーボールには、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて理解できるようにする。（評価：本時）

〈学びに向かう力、人間性等①〉作戦などについての話合いに参加しようとすることができるようにする。（評価：５／10 時間）

〈学びに向かう力、人間性等②〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとすることができるようにする。（評価：８／10 時間）

（２）本時の評価

〈知識・技能（知識）①〉バレーボールには、集団対集団で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。【個人カード】（指導：本時）

（３）展開

<table>
<tr><th></th><th>生徒の学習内容・活動</th><th>教師の指導・手立てと評価</th></tr>
<tr><td rowspan="2">はじめ
10分</td><td>1　挨拶・出欠席の確認
2　本時の説明</td><td>○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。
○本時の学習のねらいを確認する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">【学習内容】・仲間とボールをつなぎ、勝敗を競う楽しさがあることを理解すること
・話合いなどで積極的に自分の意見を伝えようとすること
・それぞれの違いに応じた課題や挑戦などを認めようとすること</td></tr>
<tr><td rowspan="2">なか
25分</td><td>3　オリエンテーション
・個人カードの配付
・バレーボールについて知る
・単元の流れを確認
・チームとトリオの確認、トリオリーダー決め、トリオカード配付
4　準備運動
・リズムジャンプ
・ボールを使った運動（直上オーバーハンドパス　15 秒）</td><td>○個人カードの記入項目の説明をする。
指導知識及び技能（知識）①
○バレーボールについて知っていることはあるか投げ掛け、イメージを膨らませていく。
○バレーボールの概要を、スライドを使って説明する。
○単元の流れを、スライドを使って説明する。
○チームとトリオを、スライドを使って発表する。
○班ごとに並ばせ、リズムジャンプを先導し行う。
○対面パスの指導をする。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">5　試しのゲームの説明
6　試しのゲーム（３分×２）
<table><tr><th></th><th>前方コート</th><th>中央コート</th><th>後方コート</th></tr><tr><td>①</td><td>A１－B１</td><td>C１－D１</td><td>E１－F１</td></tr><tr><td>②</td><td>A２－B２</td><td>C２－D２</td><td>E２－F２</td></tr></table>・兄弟チームとの合計点で競う（例：A1 と A2 の合計）
・ゲームのないチームは得点係や、ボール拾い等、ゲームのサポートをする
7　発問</td><td>○メインゲーム（試しのゲーム）のルールの説明を生徒に協力してもらいながら行う。（ルールはｐ.26 参照）</td></tr>
<tr><td colspan="2">【発問】技・戦・共生：誰もがバレーボールを楽しむためには、何が大切ですか？
技・戦：　ボールをつなぐためには何が必要ですか？　　共生：チームワークとは何ですか？

【予想される答え】
戦術：パスが上手くなること、みんなが動くこと
共生：声を掛け合うこと、協力すること</td><td>○チームワークと技能を向上させていく必要性を理解させる。
指導学びに向かう力、人間性等①②
○チームワークについて、生徒の発言をいかしながら説明する。
○チームワークを構成する要素（共生・協力・参画）を理解させ、特に共生を大切にしていくことを指導する。</td></tr>
<tr><td>まとめ
5分</td><td>8　本時のまとめ
・振返りと個人カードの記入
・次時の学習の確認</td><td>○技能差があることは当然であり、それでも、誰もが楽しむことが大切であることを確認する。
○誰もが楽しむためには、チームワークと技能を向上させていくことが大切であることを確認する。
評価知識・技能（知識）①【個人カード】
○巡回し、個人カードの記入を確認する。
○次回の授業の確認をする。</td></tr>
</table>

【授業としての振返り】

40 分授業ということもあり、活動時間が少なくなってしまったが、生徒たちは協力しながら積極的に取り組んでいた。また、メインゲームを行ったが、ルールが複雑であるため、生徒たちはルールを理解しきれていなかったように感じた。わかりやすいルールの設定が大切であると感じた。

【研究の視点からの振返り】

生徒の個人カードより、チームワークを構成する協力・参画に関する記述は多くみられたが、共生に関する記述は少なかった。そのため、もう一度チームワークとは何かを確認をし、チームワークルールの作成につなげていきたい。

【本時の展開】（２／10 時間目）　９月１日（水）　２校時（９:40～10:20）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能（技能）①〉味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができるようにする。（評価：８／10 時間）

（２）本時の評価

なし

（３）展開

<table>
<tr><th></th><th>生徒の学習内容・活動</th><th>教師の指導・手立てと評価</th></tr>
<tr><td>はじめ
5
分</td><td>1　チームごとに準備運動
2　個人カード・トリオカードの配付
3　挨拶・出欠席の確認
4　本時の説明</td><td>○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。
○前回行った準備運動ができているか、巡回し確認する。
○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。
○本時の学習のねらいを確認する。</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">【学習内容】・バレーボールの技術の名称とアンダーハンドパスを身に付けるためのポイントを理解すること
・味方が操作しやすい位置にアンダーハンドパスでボールをつなぐこと</td></tr>
<tr><td>なか
30
分</td><td>5　チームワークルールの作成（個人で考える→チームで作成）
【発問】　共生：チームワークを高めるためにどのような行動が大切ですか？
・トリオリーダー二人が中心になり、チームで話合いをする（ホワイトボードシート使用）
6　アンダーハンドパスの行い方・ポイントの確認
アンダーハンドパスのポイント
・片足前
・手首反って腕ピンッ
・手首付近にボールを当てる
・体重移動で前へ
7　基本技能の習得
アンダーハンドパスの練習（対面パス）
・チーム内で二人組を組む
・相手に投げてもらったボールをパスで返す
8　ドリルゲーム
・ネットを挟んで対面アンダーハンドパス（５球）
・トリオで行う（実施者・球出し・記録者）</td><td>指導**知識及び技能（技能）①**
○アンダーハンドパスのポイントについて実践を踏まえながら説明する。
○練習場所の指示をする。
<table><tr><td>体育館前方コート</td><td>中央コート</td><td>体育館後方コート</td></tr><tr><td>A</td><td>B</td><td>C</td></tr><tr><td>D</td><td>E</td><td>F</td></tr></table>
○練習中にポイントを意識できるように、スクリーンに映しておく。
成功
・ネットを越えて相手にボールを返球できた場合
失敗
・ボールがネットを越えなかったり、相手に返球したりできなかった場合</td></tr>
<tr><td>まとめ
5
分</td><td>9　本時のまとめ
・振返りと個人カードの記入
・次時の学習の確認</td><td>○アンダーハンドパスのポイントを復習する。
○練習中やゲーム中にみられた、共生の視点に立った言動を全体で共有させる。
○巡回し、個人カードの記入を確認する。
○次回の授業の確認をする。</td></tr>
</table>

【授業としての振返り】

アンダーハンドパスについてのポイントを伝え、練習したが、なかなか向上が見られなかった。もう少し、個人ドリル等、スモールステップを踏んで行っていくべきであったと考える。

【研究の視点からの振返り】

チームワークルールの作成については、トリオリーダーが中心となり、スムーズに行うことができていた。各チームにホワイトボードシートを用意したことも効果的だったと考える。

また、チームワークルールに関する記述がほとんどなかったことから、チームワークルールを作成したが、作成するだけでは、効果があまり見られなかった。今後、作成しただけで終わらないよう授業づくりをしていきたい。

【本時の展開】（３／10 時間目）　９月２日（木）　２校時（９:40～10:20）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能（知識）②〉バレーボールにおいて用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、理解できるようにする。（評価：本時）

（２）本時の評価

〈知識・技能（知識）②〉バレーボールにおいて用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、言ったり書き出したりしている。【個人カード】（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1　チームごとに準備運動・ドリルゲーム（ネットを挟んで対面アンダーハンドパス５球） 2　個人カード・トリオカードの配付 3　挨拶・出欠席の確認 4　本時の説明	○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。 ○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。 ○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○本時の学習のねらいを確認する。
	【学習内容】・味方が操作しやすい位置にアンダーハンドパスやオーバーハンドパスでボールをつなぐこと	
なか30分	5　チームワークルールの確認 【発問】　共生：チームワークを高めるためにどのような行動が大切ですか？ ・前時に作ったチームワークルールを確認する ・必要に応じて、追加・修正する 6　基本技能の習得 アンダーハンドパスの復習 ・片手で直上トスをし、ボールを当てる位置を確認する ・両手で直上トスをし、腕をしぼる感覚を確認する ・対面パスで、ポイントを確認する オーバーハンドパスの練習 ・ポイントを確認する ・自分で直上にボールをあげキャッチ（ボールへのタッチを確認する） ・対面で、投げられたボールをキャッチ（落下地点に入ることの確認をする） ・対面パス オーバーハンドパスのポイント ・片足前 ・窓の中から見る ・ボールの側面を触る（包み込む） ・全身で（膝を使って）送る 7　ドリルゲーム ・対面オーバーハンドパス（５球） ＊ネットを挟んで行う	○前回作成したチームワークルールを意識できるように声掛けする。 ○必要に応じて、追加や修正をしてもよいことを伝える。 **指導知識及び技能（知識）②** ○アンダーハンドパスのポイントについて実践を踏まえながら確認させる。 ○どのようなボールを出すのが望ましいのかを指導する。 ○オーバーハンドパスのポイントについて実践を踏まえながら説明する。 ○練習中にポイントが意識できるように、スクリーンに映しておく。 ○どのようなボールを出すのが望ましいのかを指導する。 ○成功と失敗を説明する。 ○投げる位置、パスをする位置を確認させる。 ○ボールの投げ方を指導する。 成功 ・ネットを越えて相手にボールを返球できた場合 失敗 ・ボールがネットを越えなかったり、相手に返球したりできなかった場合
まとめ5分	8　本時のまとめ ・振返りと個人カードの記入 ・次時の学習の確認	○アンダーハンドパスとオーバーハンドパスのポイントを復習する。 ○チームワークルールを意識した行動はとれたかを振り返らせる。 ○練習中やゲーム中にみられた、共生の視点に立った言動を全体で共有させる。 **評価知識・技能（知識）②【個人カード】** ○巡回し、個人カードの記入を確認する。 ○次回の授業の確認をする。

【授業としての振返り】

前時の練習の様子を受けて、本時はオーバーハンドパスの個人ドリル練習を行った。しかし、ボールを一人一球確保していなかったため、効率が悪く、効果が低くなってしまった。次回以降、一人一球ボールを確保し、効率を上げていきたい。

【研究の視点からの振返り】

本時は、チームワークルールの追加・修正の時間を設けた。チームワークルールがより具体的になったチームもあった。しかしながら、まだ生徒の中には浸透しておらず、仲間と協力をして、教え合って練習に取り組む姿があまり見られなかった。次回チームワークルールを再確認し、意識を高めていきたい。

【本時の展開】（４／10 時間目）　９月３日（金）　２校時（９:40～10:20）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能（技能）①〉味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができるようにする。

（評価：８／10 時間）

（２）本時の評価

なし

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1　チームごとに準備運動 ・リズムジャンプ ・ボールを使った運動（直上アンダー片手打ち、直上アンダー両手打ち、直上オーバーキャッチ） 2　個人カード・トリオカードの配付 3　挨拶・出欠席の確認 4　本時の説明	○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。 ○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。 ○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○本時の学習のねらいを確認する。
	【学習内容】・課題解決のための練習を通し、ポイントやつまずきの事例を参考に仲間に課題や出来栄えを伝えること ・課題解決のための練習を通し、仲間に助言したり、球出しなどの援助をしたりしようとすること	
なか30分	5　チームワークを高めるための良い動きの共有 6　チームワークルールの確認 7　発問	・生徒の前時までの個人カードの記述を紹介する。
	【発問】　技・戦：ゲームでいかせるパスができるようになりましたか？	
	【予想される答え】 戦術：ゲームではまだ、いかせない	・前時までの練習を振り返りながら考えさせる。
	8　基本技能の習得 対面パスと三角パス ・対面パスと三角パスを入れ替わりで行う ・対面パスは、ポイント表を見ながら行う ・三角パスは、ワンバウンド可（はじめはワンバウンドのみ）	・対面パスは、球出しも大切であることを説明する。 ・対面パスの球出しは、ネットより高いボールを出すことを指導する。 ・三角パスの説明を、実践を交えながら行う。 ・はじめは、ワンバウンドのみで行わせる。その後、ワンバウンド可に変えさせる。
	9　ラリーゲーム ・他チームと行う ・３人でつないで、相手コートに返すことを目標に行う ・兄弟チームはサーブ係と回数カウント係（得点板）に分かれゲームを運営する	・ラリーゲームのルールの説明をする。 （ルールはｐ.26 参照） ・兄弟チームの役割を指導する。
まとめ5分	10　本時のまとめ ・振返りと個人カードの記入 ・次時の学習の確認	○ラリーゲームについて振返りをする。 ○チームワークルールを、どの活動で特に意識したかを振り返らせる。 ○練習中やゲーム中にみられた、共生の視点に立った言動を全体で共有させる。 ○巡回し、個人カードの記入を確認する。 ○次回の授業の確認をする。

	前方コート	中央コート	後方コート
①	A１―D１	B１―E1	D１―F1
②	A２―D２	B２―E２	D２―F２

【授業としての振返り】

本時は三角パスを行った後、ラリーゲームを行った。三角パスではつながっていたが、ラリーゲームになるとパスがつながらなくなる。ゲームの様子から、ほとんどのチームが横１列の隊形になっていることが多いことに原因があると考えられる。そのため、次回は、ゲームでのフォーメーションを、写真を使って考えさせていきたい。

【研究の視点からの振返り】

生徒の個人カードに、「仲間に支えられた」「励ましてもらった」など、チームワークに関わる記述が増えた。このことから、本時のはじめにチームワークルールを確認する時間を設けたことは、効果的だったと考えられる。

【本時の展開】（５／10 時間目）　９月６日（月）　２校時（９:50～10:40）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能（技能）②〉プレイを開始するときは、各ポジションの定位置に戻ることができるようにする。（評価：９／10 時間）

（２）本時の評価

〈主体的に学習に取り組む態度①〉作戦などについての話合いに参加しようとしている。【観察】（指導：１／10 時間）

（３）展開

<table>
<tr><th></th><th>生徒の学習内容・活動</th><th>教師の指導・手立てと評価</th></tr>
<tr><td>はじめ5分</td><td>1　チームごとに準備運動
・リズムジャンプ
・ボールを使った運動（直上アンダー片手打ち、直上アンダー両手打ち、直上オーバーキャッチ）
・ドリルゲーム（ネットを挟んで対面アンダーハンドパス、オーバーハンドパスを５球ずつ）
2　個人カード・トリオカードの配付
3　挨拶・出欠席の確認
4　本時の説明</td><td>○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。
○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。
○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。
○前時の個人カードの良い記述を紹介する。
○本時の学習のねらいを確認する。</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">【学習内容】・定位置に戻ることや、ボールに正対するなどのボールを持たないときの動きを身に付けること</td></tr>
<tr><td>なか40分</td><td>5　発問
【発問】　技・戦、共生：得意不得意を踏まえて、どのようなフォーメーションだと、ボールがつながりやすいですか？
【予想される答え】
三角形、距離をとる、得意な人が最初に触れる位置
6　フォーメーションについての確認
写真を見て隊形の分析
・前時のゲームの自分たちの写真をみて、どのようにすればボールがつながりやすいのかを分析する
フォーメーションについて考える
・作戦ボードを使い、各トリオに合わせたフォーメーションを考える
7　ボールを持たないときの動きの説明
8　課題解決の練習
つないで返球！練習
・兄弟チームに投げてもらったボールを、３人でつないで返球する
・コートの半面を使い、壁の方向へ向かって返球する
9　ラリーゲーム
・他チームと行う
・３人でつないで、相手コートに返すことを目標に行う
・兄弟チームはサーブ係と回数カウント係（得点板）に分かれゲームを運営する
<table><tr><th></th><th>前方コート</th><th>中央コート</th><th>後方コート</th></tr><tr><td>①</td><td>A１―F１</td><td>B１―D1</td><td>C１―E1</td></tr><tr><td>②</td><td>A２―F２</td><td>B２―D２</td><td>C２―E２</td></tr></table></td><td>○前時のラリーゲームでの隊形はどうだったか、写真で確認させる。
○仲間と近すぎるとパスをつなげにくいことを指導する。
○ネットから遠くなってしまうと、返球しづらくなってしまうことも指導する。
指導知識及び技能（技能）②
○教師用作戦ボードを使い、定位置を考えるよう説明する。
○どのような順番で、どこへつないでいけば返球しやすいか考えさせる。
○ボールに正対すること、準備姿勢の必要性も指導する。
○練習の仕方を説明する。
○つなぐ際と返球の際の、腕の角度や手の向きの違いについて指導する。
○球出しも大切であることを指導する。
評価主体的に学習に取り組む態度①【観察】
・ラリーゲームのルールの説明をする。
（ルールはｐ.26 参照）</td></tr>
<tr><td>まとめ5分</td><td>10　本時のまとめ
・振返りと個人カードの記入
・次時の学習の確認</td><td>○フォーメーションについて、作戦ボードを使い、振返りを行い、トリオカードに記入させる。
○練習中やゲーム中にみられた、共生の視点に立った言動を全体で共有させる。
○巡回し、個人カードの記入を確認する。
○次回の授業の確認をする。</td></tr>
</table>

【授業としての振返り】

自分たちの前時のゲーム時の写真を基に、パスをつなぐためのフォーメーションを考える時間を設けたことにより、ラリーゲームでのパスのつながりが良くなった。生徒の個人カードからも、フォーメーションを考える活動は効果的だったことが伺える。

【研究の視点からの振返り】

前時のゲームを基に、フォーメーションを考える活動において、生徒の個人カードに「ポジション決めとか、作戦とかして、グループの意見を聞くことができたし、積極的に意見も言えました」とあったように、チームワークルール等が浸透し、話合いも有効に進んだと考えられる。

【本時の展開】（６／10 時間目）　９月７日（火）　２校時（９:50～10:40）　体育館

（１）本時の目標

〈思考力、判断力、表現力等①〉提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間に課題や出来栄えを伝えることができるようにする。（評価：本時）

（２）本時の評価

〈思考・判断・表現①〉提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間に課題や出来栄えを伝えている。【個人カード・観察】（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1　チームごとに準備運動 ・リズムジャンプ ・ボールを使った運動（直上アンダー片手打ち、直上アンダー両手打ち、直上オーバーキャッチ） ・ドリルゲーム（ネットを挟んで対面アンダーハンドパス、オーバーハンドパスを５球ずつ） 2　個人カード・トリオカードの配付 3　チーム練習 4　挨拶・出欠席の確認 5　本時の説明	○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。 ○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。 ○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○前時の個人カードの良い記述を紹介する。 ○本時の学習のねらいを確認する。
	【学習内容】・味方が操作しやすい位置にアンダーハンドパスやオーバーハンドパスでボールをつなぐこと	
なか40分	6　発問 【発問】　技・戦：アンダーハンドパスとオーバーハンドパスを、どのように使い分けていますか？ 【予想される答え】 戦術：高いボールはオーバーハンドパス、低いボールはアンダーハンドパス 7　課題解決の練習 1対2パス ・球出しに正対し、正面に返す ・アンダーハンドパスとオーバーハンドパスの使い分け（20 秒） 1対2斜めパス ・球出しに正対し、斜めに返す ・アンダーハンドパス（20 秒） ・オーバーハンドパス（20 秒） ・アンダーハンドパスとオーバーハンドパスの使い分け（20 秒） 8　ラリーゲーム ・他チームと行う ・３人でつないで、相手コートに返すことを目標に行う ・兄弟チームはサーブ係と回数カウント係（得点板）に分かれゲームを運営する	○どのように使い分けるのがよいのか投げかける。 ○上手な生徒はどのように使い分けているか聞いてみる。 ○使い分ける基準は、「胸より上はオーバーハンドパス、胸より下はアンダーハンドパス」と指導する。 **指導思考力、判断力、表現力等①** ○練習の仕方およびポイントを、得意な生徒による実践を踏まえて指導する。 ○効率よくできるよう指導する。 ○準備姿勢で正対することを指導する。 ○練習の仕方およびポイントを、得意な生徒による実践を踏まえて指導する。 ○腕の面を向け、体重移動で送り出すことを指導する。 ○ラリーゲームのルールを確認する。 （ルールはｐ.26 参照）

	前方コート	中央コート	後方コート
①	A１―E１	B１―F１	C１―D１
②	A２―E２	B２―F２	C２―D２

まとめ5分	9　本時のまとめ 【発問】　共生：仲間の良いところはどこですか？ ・認め合い活動 ・振返りと個人カードの記入 ・次時の学習の確認	 ○仲間の個人カードに、その人の良いところを記入させる **評価思考・判断・表現①【観察・個人カード】** ○ラリーゲームについて振り返らせる。 ○巡回し、個人カードの記入を確認する。 ○次回の授業の確認をする。

【授業としての振返り】

本時は、斜めの方向へパスを出していくことと、アンダーハンドパスとオーバーハンドパスの使い分けを意識させ練習を行った。斜めにパスを出していくための体の使い方は理解できていたようである。しかし、アンダーハンドパスとオーバーハンドパスの使い分けで生徒たちは混乱していたように思える。次回、使い分けの基準（胸より高いか低いか）は原則であり、得意不得意も踏まえ判断することも大切であることを伝えることが必要であると考える。

【研究の視点からの振返り】

生徒の個人カードに、「味方に出すパスは、相手を思うパスなんだと思った」という記述がみられたことから、チームワークをいかし技能を高めていく必要性に気付いている生徒もいると考えられる。しかし、そのような記述や行動は、まだ全体的に多くはないため、チームワークを意識させるような工夫が必要であると考える。

【本時の展開】（７／10 時間目）　９月 13 日（月）　２校時（９:50～10:40）　体育館

（１）本時の目標

〈思考力、判断力、表現力等②〉体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。（評価：本時）

〈学びに向かう力、人間性等③〉練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとすることができるようにする。（評価：９／10 時間）

（２）本時の評価

〈思考・判断・表現②〉体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。【個人カード、観察】　（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1　チームワークルールの確認 2　チームごとに準備運動（リズムジャンプ） 3　個人カード・トリオカードの配付 4　挨拶・出欠席の確認 5　本時の説明	○準備運動からチームワークルールを意識できるよう確認させる。 ○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。 ○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。 ○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○本時の学習のねらいを確認する。
	【学習内容】・提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、課題や出来栄えを伝えること ・球出しなど練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとすること	
なか40分	6　メインゲームのルール確認 ・次時以降行うメインゲームのルールを確認する	○練習にもいかせるよう、メインゲームのルールの説明をする。（ルールはｐ.26 参照）
	7　発問 【発問】　技・戦：パスがつながるときとつながらないときは、何が違いますか？	
	【予想される答え】 戦術：ボールの軌道が違う ボールをつなぐ位置が違う	
	8　映像分析 ・前時のラリーゲームの映像を基にボールがつながるときとつながらないときの違いを分析する 見るポイント ①パスをする際の、ボールと体の位置関係はどうか ②パスをするまでの、時間的余裕はどうか	**指導思考力、判断力、表現力等②** ○何を分析すればよいか分かるよう、見るポイントを伝える。 ○これら二つを解決するためにボールの軌道はどうするか、ボールをどこに集めるかを考えるよう指導する。
	9　課題解決の練習 ・今まで取り組んだ練習や、自分たちで考えた練習に取り組む	**指導学びに向かう力、人間性等③** ○安全が確保できているか巡回し観察する。 ○取り組んでいる練習の意図を確認する。
まとめ5分	10　本時のまとめ ・振返りと個人カードの記入 ・次時の学習の確認	**評価思考・判断・表現②【観察】** ○練習を振り返らせる。 ○練習中やゲーム中にみられた、共生の視点に立った言動を全体で共有させる。 ○巡回し、個人カードの記入を確認する。 ○次回の授業の確認をする。

【授業としての振返り】

本時は、ゲームの映像を基に各チームの課題を認識させた。それを基に練習を行うことで、何を練習すればよいかが明確になった。また、メインゲームのルールを説明したことにより、効果的にワンバウンドを使うチームもあり、パスがつながるようになったと考える。

【研究の視点からの振返り】

本時の最後の振返りの時間に、生徒へパスをつなぐためにどんなことを大切にしたかを投げかけたところ「相手意識」という言葉が出た。この言葉に他の生徒も納得する様子が見られ、技能を高めるためには仲間のことを考えることが大切だと気付けたのではないかと考える。

【本時の展開】（８／10 時間目）　９月 14 日（火）　２校時（９:50～10:40）　体育館

（１）本時の目標

〈学びに向かう力、人間性等②〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとすることができるようにする。（評価：本時）

（２）本時の評価

〈知識・技能（技能）①〉味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができる。

【観察】（指導：２／10 時間）

〈主体的に学習に取り組む態度②〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとしている。【観察】（指導：１／10 時間）

（２）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ５分	1　チームワークルールの確認 2　チームごとに準備運動（リズムジャンプ） 3　個人カード・トリオカードの配付 4　挨拶・出欠席の確認 5　本時の説明	○準備運動からチームワークルールを意識できるよう確認させる。 ○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。 ○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。 ○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○本時の学習のねらいを確認する。
	【学習内容】・体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えること	
なか40分	6　課題解決の練習 ①つないで！返球練習 ・自コートから投げられたボールをつなぎ返球する ・相手コートから投げられたボールをワンバウンドでレシーブし、３人でつなぎ返球する ②空いているスペースで今まで行った練習に取り組む ＊①②をローテーションして行う 7　メインゲーム ・４分×２試合 ・兄弟チームとの合計点で競う （前方コート／中央コート／後方コート） ① Ａ１―Ｆ１　Ｂ１―Ｄ１　Ｃ１―Ｅ１ ② Ａ２―Ｆ２　Ｂ２―Ｄ２　Ｃ２―Ｅ２	**評価主体的に学習に取り組む態度②【観察】** ○時間を見ながら、交代のタイミングを指示する。 ○１回目の「つないで返球！練習」の際は、自コートから投げられたボールをつなぎ返球するものに取り組ませる。 ○２回目の「つないで！返球練習」の際は、自コートから投げられたボールをつなぐものか、相手コートから投げられたボールをワンバウンドでレシーブし、３人でつなぎ返球するもののどちらかを選択させ取り組ませる。 ○空いているスペースでの練習は、安全を確保し取り組ませる。 ○メインゲームのルールを確認する。 （ルールはｐ.26 参照） **評価知識、技能（技能）①【観察】** ○ゲームが適切に行えているか、巡回し観察する。 ○前向きな言葉掛けなど、共生の視点に立った言動がとれているか、巡回し観察する。
まとめ５分	8　本時のまとめ ・振返りと個人カードの記入 ・次時の学習の確認	○練習やゲームを振り返らせる。 ○練習中やゲーム中にみられた、共生の視点に立った言動を全体で共有させる。 ○巡回し、個人カードの記入を確認する。 ○次回の授業の確認をする。

【授業としての振返り】

本時はネットを挟んだ練習を取り入れた。ゲームに近い練習ができたため、生徒の個人カードからも、技能が高まったことが伺える。しかし、ゲームで相手から返球されたボールを拾うことができない場面が見られ、ラリーが続くことがまだ多くない。そのため、相手の返球に備えたフォーメーションを考えさせる必要があると考える。

【研究の視点からの振返り】

前時に生徒から出た「相手意識」という言葉を、本時の始めに改めて確認をしたことで、多くの生徒たちは、それを意識したプレイや行動をしていた。個人カードの記述には、ほとんどの生徒が技能やチームワークの高まりに関するものを書いていた。次回以降も、「相手意識」というキーワードを大切にしたい。

【本時の展開】（９／10 時間目）　９月 16 日（木）　２校時（９:50～10:40）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能（技能）①〉味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができるようにする。（評価：７／10 時間）

（２）本時の評価

〈知識・技能（技能）②〉【観察】プレイを開始するときは、各ポジションの定位置に戻ることができる。（指導：５／10 時間）

〈主体的に学習に取り組む態度③〉練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。**【観察】**（指導：７／10 時間）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ５分	1　チームワークルールの確認 2　チームごとに準備運動（リズムジャンプ） 3　個人カード・トリオカードの配付 4　挨拶・出欠席の確認 5　本時の説明 【学習内容】・相手からの返球に備えて、各ポジションの定位置に戻ることができる	○準備運動からチームワークルールを意識できるよう確認させる。 ○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。 ○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。 ○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○本時の学習のねらいを確認する。
なか40分	6　発問 【発問】共生：ゲーム中の声掛けで大切なことは何ですか？ 【予想される答え】 積極的に声を出す 7　発問② 【発問】技・戦：相手コートからくるボールを拾うことは難しいですか？ 【予想される答え】 難しい、自コートから投げてもらうより難しい ・相手コートからくるボールに対してどうすれば、対応できるかを、作戦ボードを使い、簡単に話し合う 8　課題解決の練習 ①つないで返球！練習 ・相手コートから投げられたボールをつなぎ返球する ・兄弟チームでラリーゲームをする ②空いているスペースで距離をとった対面パスをする ＊①②をローテーションして行う 9　話合い ・練習を踏まえて相手コートからくるボールに対してどのようなフォーメーションで対応するかについて作戦ボードを使い、話し合う 10　メインゲーム ・４分×２試合 ・兄弟チームとの合計点で競う （前方コート／中央コート／後方コート） ① Ａ１―Ｅ１／Ｂ１―Ｃ１／Ｄ１―Ｆ１ ② Ａ２―Ｅ２／Ｂ２―Ｃ２／Ｄ２―Ｆ２	○声を出すことにも得意不得意があることを理解させる。 ○ゲーム中の声の掛け合いにも共生の視点を踏まえることが大切であることを指導する。 ○前時のゲームを振り返りながら、発問をする。 ○実践を交えて、自コートから投げられるボールと相手コートからくるボールの違い（ボールの軌道や弾み方等）を説明する。 ○相手コートからくるボールに対して、どのように対応するかについて作戦ボードを使い、考えさせる。 **評価 主体的に学習に取り組む態度③【観察】** ○時間を見ながら、交代のタイミングを指示する。 ○１回目の「つないで返球！練習」の際は、相手コートから投げられたボールをつなぎ返球するものに取り組ませる。 ○２回目の「つないで返球！練習」の際は、兄弟チームでのラリーゲームに取り組ませる。 ○空いているスペースでの練習は、安全を確保し取り組ませる。 ○練習を相手コートからくるボールに対して、どのようなフォーメーションで対応するかについて作戦ボードを使い考えさせる。 **評価 知識、技能（技能）②【観察】** ○メインゲームのルールをスクリーンに映す。 ○ゲームが適切に行えているか、巡回し観察する。 ○前向きな言葉掛けなど、共生の視点に立った言動がとれているか、巡回し観察する。
まとめ５分	11　本時のまとめ ・振返りと個人カードの記入 ・次時の学習の確認	○メインゲームについての振返りをさせる。 ○練習中やゲーム中にみられた、共生の視点に立った言動を全体で共有させる。 ○巡回し、個人カードの記入を確認する。 ○次回の授業の確認をする。

【授業としての振返り】

本時は、相手コートから返球されたボールに対するフォーメーションを、作戦ボードを使い考える時間を設けた。自コートからサービスとして投げられるボールと相手コートから返球されるボールでフォーメーションを変えることにより、ラリーが続くことが増えてきたため、この活動は効果的だったと考える。

【研究の視点からの振返り】

発問を通して、ゲーム中での声掛けについて考える時間を設けた。声を出すことにも得意不得意があり、得意な生徒が苦手な生徒をカバーすることの大切さを生徒は理解している様子だったが、ゲーム中に行動として表すことが難しいようであった。そのため、ゲーム中に自然と声が出せるような工夫をする必要性を感じた。

【本時の展開】（10／10 時間目）　９月 17 日（金）　２校時（９:50～10:40）　体育館

（１）本時の目標

〈学びに向かう力、人間性等②〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとすることができるようにする。（評価：８／10 時間）

（２）本時の評価

〈総括的評価〉【観察、個人カード】

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ5分	1　チームワークルールの確認 2　チームごとに準備運動（リズムジャンプ） 3　個人カード・トリオカードの配付 4　挨拶・出欠席の確認 5　本時の説明	○準備運動からチームワークルールを意識できるよう確認させる。 ○準備運動の流れが分かるように、スクリーンに映す。 ○準備運動がしっかりできているか、巡回し確認する。 ○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○本時の学習のねらいを確認する。
	【学習内容】・誰もが楽しむことができるための方針を決め、ゲームを楽しむこと	
なか40分	6　発問 【発問】　技・戦、共生：誰もがゲームを楽しむために大切なことは何ですか？ 【予想される答え】 仲間が操作しやすいボールを送る、前向きな声を掛け合う	○今まで授業で行ってきたことを簡単に振り返る。
	7　誰もがゲームを楽しむための方針づくり ・誰もが楽しむために、戦術的なこととチームワークに関わることをそれぞれ一つずつ考えさせる	○今まで授業で行ってきたことをいかして考えられるよう指導する。 ○戦術的なことと、チームワークに関わることを一つずつ考えさせる。
	8　ゲームに向けての練習 ・チームで円陣パスを行う 練習場所 Aコート（体育館前方）：A Bコート（中央）：B Cコート 体育館後方：C D　E　F ＊それぞれのチームは、各コートの半面ずつを使い練習を行う	○チームで声を掛け合い盛り上がってできるよう、投げかける。 ○気分が高まるよう、音楽をかける。 ○練習が適切に行えているか、安全確保はできているかなど、巡回し観察する。
	9　メインゲーム ・４分×６試合 ・兄弟チームとの合計点で競う ①　A―B　C―D　E―F ②　A―B　C―D　E―F ③　A―D　B―E　C―F ④　A―D　B―E　C―F ⑤　A―F　B―D　C―E ⑥　A―F　B―D　C―E	○メインゲームのルールをスクリーンに映す。（ルールはｐ.26 参照） ○ゲームが適切に行えているか、巡回し観察する。 ○前向きな言葉掛けなど、共生の視点に立った言動がとれているか、巡回し観察する。
まとめ5分	10　本時のまとめ 【発問】　今回のバレーボールを通して何を学びましたか？ ・振返りと個人カードの記入 ・単元の学習の総まとめ	○単元の振返りをさせる。 ○みんなが楽しめるために意識したことについて振り返ることができるよう声掛けをする。 ○巡回し、個人カードの記入を確認する。

【授業としての振返り】

ゲーム前の練習の際に、アップテンポの音楽を流す工夫をした。その結果、練習でも、ゲームでも、自然と声が出ていた。また、ゲームでラリーが続くことがかなり増えたため、今までで一番盛り上がりのある授業となった。

【研究の視点からの振返り】

本時は、チームワークと技術・戦術の双方の要素を持たせた発問を通して、誰もがゲームを楽しむための方針づくりに取り組ませた。それを意識することにより、「チームの人ととりやすいパスを出し合ったり、ゲームでは励まし合ったり、応援して楽しかった」と記述している生徒もいた。また、チームワークが高まったことで、バレーボールを楽しめたと記述した生徒も多数いた。

６　検証授業の結果と考察

検証授業から得られたデータを基に、設定した検証の視点（pp. 14-17）に沿って仮説を検証する。

なお、文中に使用した図表の標本数は表９に示したとおりであり、欠席者及び見学者によって変化がある。

表９　文中に使用した標本数

日付	8/31	９/１	９/２	９/３	９/６	９/７	９/13	９/14	９/16	９/17
時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
生徒数(名)	**32**	**32**	**33**	**33**	**32**	**33**	**32**	**32**	**33**	**31**
事前アンケート（８月 30 日）**33 名**					事後アンケート（９月 22 日）**33 名**					

本研究においては、「そう思う」、「どちらかというとそう思う」、「どちらかというとそう思わない」、「そう思わない」の４件法によるアンケート結果において、「そう思う」、「どちらかというとそう思う」を合わせて「そう思う群」「どちらかというとそう思わない」、「そう思わない」を合わせて「そう思わない群」として、グラフには数値を太枠で囲んで示した。

また、割合（%）を示しているグラフについては、小数点以下を四捨五入しているため、100%にならない場合がある。

なお、文中の生徒の記述については、誤字・脱字を除き、生徒が記述したままの表現で記載し、太字、下線は筆者が加筆した。

（１）生徒は授業をどのように捉えたか

ア　生徒は毎時間の授業をどのように捉えたか

高橋らの作成した生徒による授業評価であり、診断基準により５段階評定を出すことのできる「形成的授業評価法（p. 11 参照）」（高橋他　2003）で分析を行なった。これは、成果、意欲・関心、学び方、協力の４次元９項目からなり、項目や次元ごとに、はい（３点）、どちらでもない（２点）、いいえ（１点）として平均点を算出して活用する。

表 10 は、毎時間の各項目と総合評価の平均値を形成的授業評価診断基準（p. 11 **表４参照**）に照らし合わせた結果を示したものである。

また、図 16 は、次元ごとと総合評価の平均値の推移を示したものである。総合評価の診断基準では、評定５（平均値 2.77 以上）を「特に優れた授業」、評定４（平均値 2.58 以上）を「よい授業」と捉えることができるとされている。

表 10　形成的授業評価の推移（４次元「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」及び「総合評価」の得点と５段階の評定）

次元＼時間		1 時間目	2 時間目	3 時間目	4 時間目	5 時間目	6 時間目	7 時間目	8 時間目	9 時間目	10 時間目
成果	得点	1.99	2.47	2.57	2.48	2.48	2.57	2.63	2.72	2.61	2.84
	評定	2	4	4	4	4	4	4	5	4	5
意欲・関心	得点	2.73	2.82	2.88	2.83	2.85	2.91	2.89	2.86	2.74	2.97
	評定	3	4	4	4	4	4	4	4	3	4
学び方	得点	2.32	2.81	2.91	2.88	2.87	2.97	2.89	2.97	2.92	2.97
	評定	3	5	5	5	5	5	5	5	5	5
協力	得点	2.70	2.86	2.94	2.92	2.87	2.94	2.97	3.00	2.94	2.95
	評定	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5
総合評価	得点	2.38	2.71	2.80	2.75	2.74	2.82	2.82	2.87	2.78	2.92
	評定	3	4	5	4	4	5	5	5	5	5

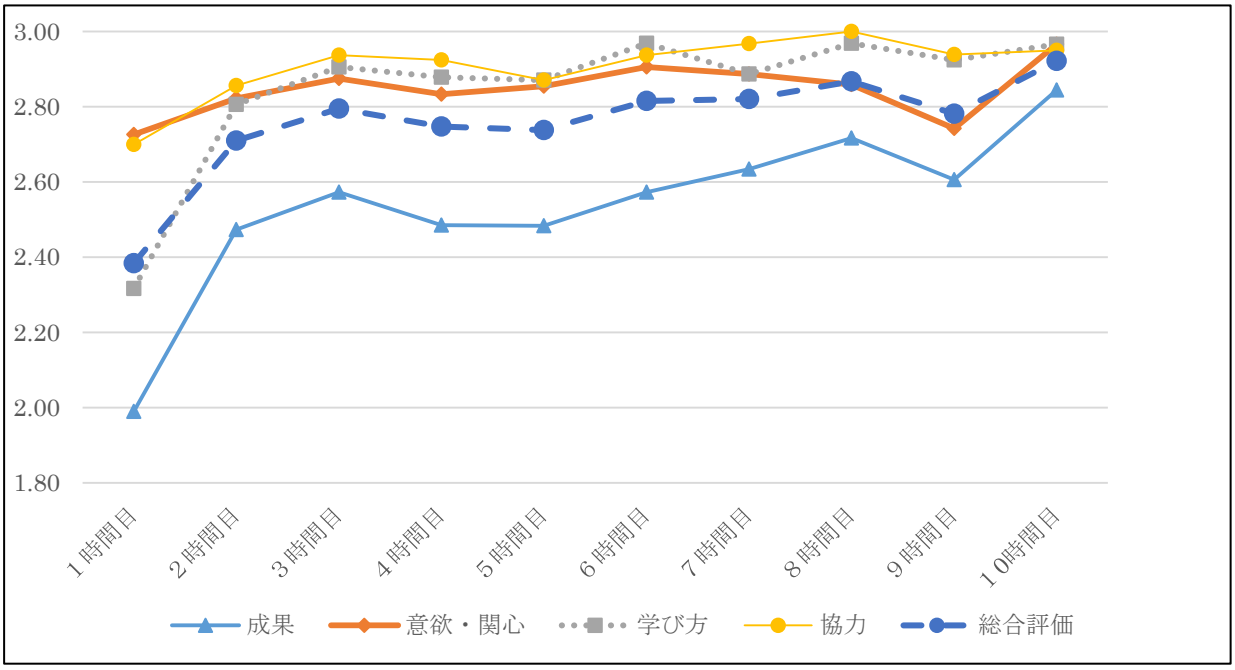


図 16　形成的授業評価の推移（４次元及び総合評価の得点）

表 10 を見ると、「協力」の次元の評定は２時間目以降最高得点の５であった。これは、２時間目にチームワークルールを作り、それにより、チームで協力することを意識することができたからではないかと考えられる。総合評価の評定については、２時間目以降は「４」以上を示し、６時間目以降は毎時間「５」を示した。このことからも、生徒は授業を肯定的に捉えたと判断できる。

図 16 を見ると、単元を通して評価は向上しているが、９時間目のみ、全次元及び総合評価が下がっている。これは、個人カードに「前回よりもボールをとるのが上手くできるよ

うになったが、でもそこから点をとることがあまりできなかったから、次はそこを頑張りたい」と記述している生徒もいるように、技能の高まりを感じ、求めるものも高くなったが、求めるものと自分の成果にギャップを感じるようになったからではないかと考えられる。

また、「意欲・関心」の次元は、１～９時間目では大きな変化が見られなかった。これは、授業を行ったクラスは実態調査の結果より、バレーボールに苦手意識がある生徒が多く、そのような生徒が「楽しかったですか」という質問に対して、「どちらでもない」と答えることが多い傾向があったためと考えられる。しかし、10 時間中８時間は、評定４であるため決して低い評価ではないと考えられる。また、10 時間目は満点に近い得点であるため、最後には、意欲・関心も向上したと考えられる。

10 時間を通してみると、概ね右肩上がりとなり、診断基準による総合評価は１、２、４、５時間目を除き「５」を示し、生徒は授業を肯定的に捉えたと考えられる。

イ　バレーボールの単元を生徒はどのように捉えたか

表 11 は、事後アンケートの「今回のバレーボールの授業の感想を書いてください」という質問の回答の自由記述を抜粋したものである。なお、表の上段２名の生徒はバレーボールが得意な生徒、下段２名の生徒はバレーボールが苦手な生徒の記述である。

表 11　事後アンケートの「今回のバレーボールの授業の感想」の記述（抜粋）

得意	生徒Ａ：最初は、チームの人と自分の意見を出し合ったり話したりするのが少なかったけど、最後の方はチームワークも深まったし、ボールもつなげるようになって楽しかった。
	生徒Ｂ：仲間と話し合って作戦をつくって、その後の実践、反省、練習、そしてまた試合をするというのは、仲間との交流がたくさんあって楽しかったです。
苦手	生徒Ｃ：はじめは正直嫌だったし、動きたくなかったけれど、チームの人のおかげで頑張れたので、思っていたより動いたし、楽しい授業でした。
	生徒Ｄ：最初は本当にチームの足をひっぱりそうで怖かったけど、先生やチームのアドバイスをもとにたくさん練習したら、だんだん成長できて楽しかったです。

事後アンケートの「今回のバレーボールの授業の感想」の記述では、否定的な記述はなく、全体の 91％の生徒が、「楽しかった」や「良かった」などの肯定的な記述をしていた。

表 11 を見ると、仲間との交流や意見交換などが増えたこと、仲間の支えによって成長できたこと、チームワークが深まり、楽しさを感じたなどの記述がみられる。

これらのことが要因となり、バレーボールの得意不得意に関わらず、多くの生徒がバレーボールの単元を肯定的に捉えたと考えられる。

以上のことから、多くの生徒は、授業を肯定的に捉えたと考える。

検証の視点「（１）生徒は授業をどのように捉えたか」のまとめ

・形成的授業評価の診断基準による総合評価が、２時間目以降、評定５段階のうち４以上を示しており、概ねの生徒は授業を肯定的に捉えていた。
また、事後アンケートの記述から、バレーボールの得意不得意に関わらず、バレーボールの単元を多くの生徒は肯定的に捉えたと考えられる。

（２）生徒は共生の視点の重視し、仲間との関わり方について考える学習をどのように捉えたか

図 17 は、事後アンケートの「発問や活動を通して、チームワークについて考える授業の流れは、チームワークを高めるうえで有効であったか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

図 18 は、事後アンケートのチームワークに関わる発問や活動を通して、「『共生の意識をもつこと、協力すること、参画すること』の大切さに気付くことができたか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

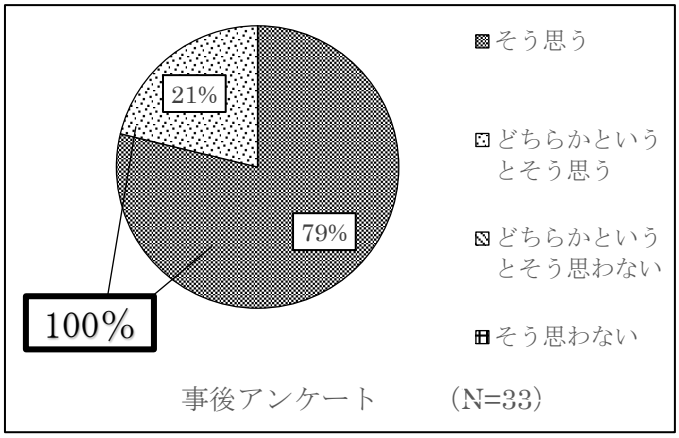


図 17　「授業の流れは、チームワークを高めるのに有効であったか」に対する回答割合

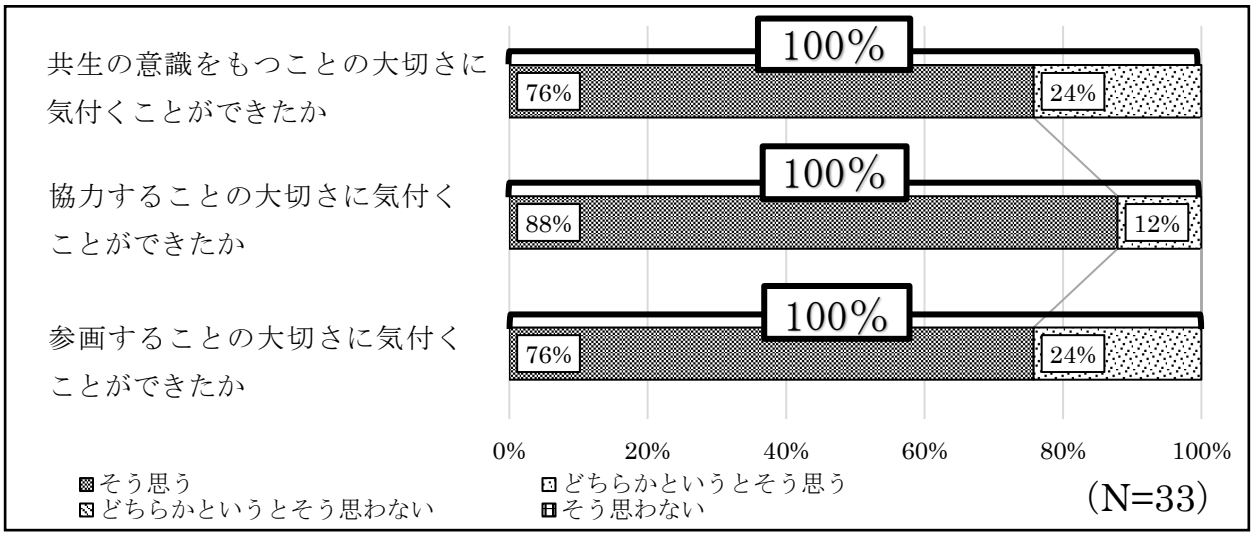


図 18　「共生・協力・参画することの大切さに気付くことができたか」に対する回答割合

図 17 を見ると、「そう思う群」の割合が 100%を占めた。このことから、発問や活動を通してチームワークについて考える授業の流れは有効であったと考えられる。

図 18 を見ると、すべての項目において「そう思う群」の割合が 100%を占めた。また、「共生」「参画」に関しては、「そう思う」の回答が 76%であったのに対し、「協力」については、「そう思う」の回答が 88%となった。生徒の記述を見ても、「協力」という言葉を用いて振返りを行っていることが多く、本研究におけるチームワークを高めるための指導事項である「共生・協力・参画」の３項目の中で、特に「協力」という言葉は馴染みがあり、具体的な姿をイメージしやすかったことが要因であると考えられる。しかしながら、「共生」「参画」についても高い数値を示した。

図 19～21 は、事後アンケートの「チームワークを高めるうえで、『チームワークルール、認め合い活動、誰もがゲームを楽しむための方針づくり（pp. 22～24 参照）』は有効であったか」という質問（４件法）に対する回答割合である。また、表 12～14 はそれらの回答理由の記述を抜粋したものである。なお、表の上段２名の生徒はバレーボールが得意な生徒、下段２名の生徒はバレーボールが苦手な生徒の記述である。

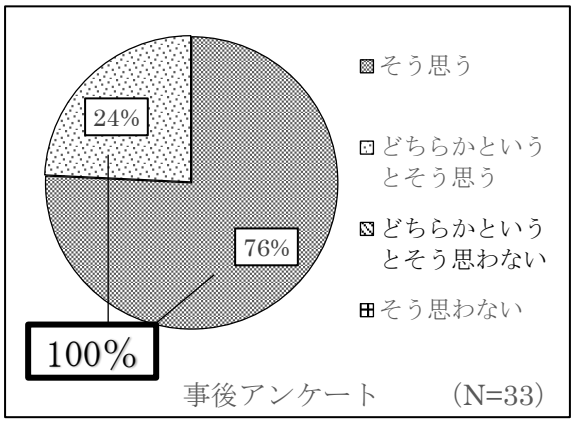


図 19　「チームワークルールは有効であったか」に対する回答割合

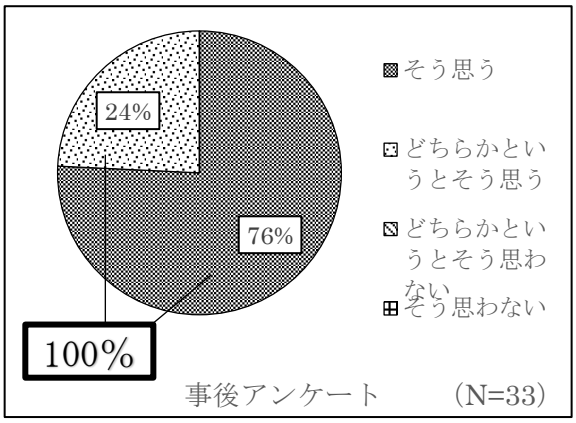


図 20　「認め合い活動は有効であったか」に対する回答割合

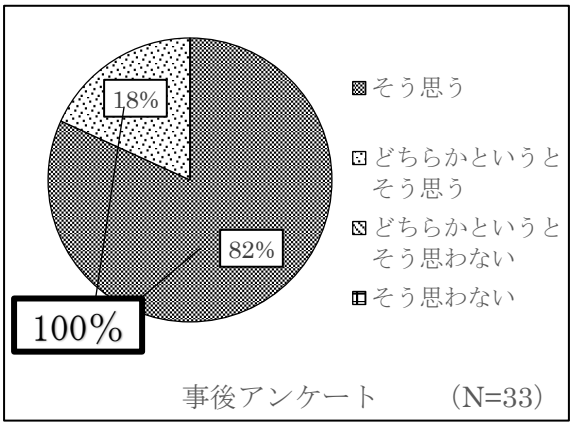


図 21「誰もがゲームを楽しむための方針づくりは有効であったか」に対する回答割合

表 12 「チームワークルールは有効であったか」に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒Ｅ：チームワークルールを作れば、それを不安に思っていた人とかも安心して授業に取り組めるから。
	生徒Ｆ：チームワークルールを確認したりすると声掛けやアドバイスがいつもより増え、チームワークが高まったと思います。
苦手	生徒Ｇ：団結力が生まれるので良いと思いましたが、試合になれると忘れてしまうことが多いです。
	生徒Ｈ：チームワークは試合で自然に高まり、どちらかというとそれほどチームワークルールを意識することはなかったと思う。しかし、互いを褒め合ったり、意見交換の場では、チームワークルールにのっとってみんな発言をしていた。

表 13 「認め合い活動は有効であったか」に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒Ｉ：互いの良いところを褒めるということは自信をつけられて、もっとお互いを信じてプレイをできるから。
	生徒Ｊ：良いところを書いてあげれば、嬉しいと思うし、もっと頑張ろうとやる気が出るから、さらにチームワークが高まると思ったからです。
苦手	生徒Ｋ：良いところを教えてもらうと、モチベーションが上がったから。試合でも少し自分から行けるようになった。
	生徒Ｌ：自分はチームのためにこんなことができているのだと思えてうれしかった。

表 14 「誰もがゲームを楽しむための方針づくりは有効であったか」に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒Ｍ：どうするかをあらかじめ決めておけば、困ったりせず、試合が良く進みチームワークが高まると思うから。
	生徒Ｎ：**誰もがゲームを楽しむための方針を決め、**そうすることで成功率が大幅に上がったから。
苦手	生徒Ｏ：技能などを知ることで、その人に合ったポジションを考えられるから。
	生徒Ｐ：負けても誰も責めたり文句を言わなかったので良かったと思います。

図 19～21 を見ると、いずれも、「そう思う群」の割合は 100%を占めた。このことから、いずれの活動も、チームワークを高める上で有効であったと考えられる。

表 12 を見ると、チームワークルールの作成及び確認によって、練習では、安心感を持って取り組めたこと、声掛けやアドバイス、褒め合いが増えたこと、話合い活動では、自分たちで決めたチームワークルールに則って進められたことが書かれていた。一方で、試合になるといかしきれなかったことも記述されていた。このことから、チームワークルールの作成及び確認は練習や話合い活動で特に有効であったと考えられる。

表 13 を見ると、認め合い活動は、モチベーションが上がり試合でも積極的になれたこと、互いを信じプレイすることにつながったこと、チームに貢献できていることに気付けたこと

などが書かれていた。このことから、認め合い活動は、前向きになることへ有効であったと考えられる。

表 14 を見ると、誰もがゲームを楽しむための方針づくりは、技術や戦術など、ゲームをよりよく進めていくことに効果があったこと、メンバーとの関わり合いにも効果があったことが書かれていた。このことから、技術・戦術とチームワークの双方に有効であったと考えられる。

以上のことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習は、チームワークを高める上で有効に機能したと考えられ、全ての生徒が肯定的に捉えたと考えられる。

検証の視点「（２）生徒は共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習をどのように捉えたか」のまとめ

・授業の流れは、チームワークを高めるのに有効であった。
・チームワークに関わる発問や活動を通して、「共生・協力・参画」の大切さへの気付きを促すことができ、特に「協力」の大切さに気付くことに有効であった。
・共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習活動は、チームワークを高めることに有効であった。
・全ての生徒が、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習は、チームワークを高める上で有効に機能したと考えられ、全ての生徒が肯定的に捉えた。

（３）チームワークは高まったか

ア　共生の意欲が行動として表れたか

図 22 は、事前・事後アンケートの「違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動などができたか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

表 15 は、事後アンケートの「違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動などができたか」という質問に対しての回答理由の記述（抜粋）である。

表 16 は、事後アンケートの「違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動などができたか」という質問に対して、「どちらかというとそう思わない」と回答した生徒の回答理由の記述である。なお、これらの生徒は、事前では「そう思う群」であった生徒である。

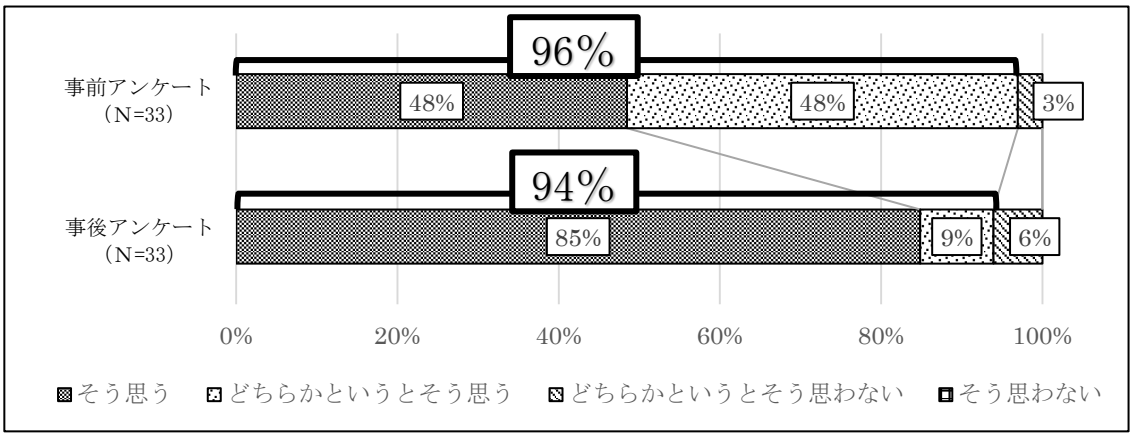


図 22　「違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動などができたか」に対する回答割合の事前・事後の比較

表 15　「違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動などができたか」に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒Ｑ：みんなで良さを伸ばし、苦手を補い合えた。
	生徒Ｒ：マイナスな発言を言わないようにして、プラスな声掛けをするようにしたから。
苦手	生徒Ｓ：技能や得意でポジションを考えることができたから。
	生徒Ｔ：人を責めないで、いい声掛けができたから。

表 16　「違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動などができたか」に対して「どちらかというとそう思わない」と回答した生徒の回答理由の記述

	事前アンケート	事後アンケート
生徒Ｕ	運動が得意な子にたくさん助けてもらったから。	声を出すのが苦手であまりできなかった。
生徒Ｖ	運動ができなくても楽しむことができたと思う。	行動は**授業で学習した**通りやっていただけですが、言葉掛けは特になかったです。

図 22 を見ると、「そう思う群」が事前では 96%だったのに対して、事後では 94%と２ポイント減少したが、「そう思う」の割合は、事前の 48%から事後では 85%と 37 ポイント上昇した。なお、事前で「そう思わない群」であった生徒は、「そう思う群」に変容する結果となった。

また、表 15 を見ると、得意不得意に関わらず、互いの違いを認め合った行動や言葉掛けをすることができたことを記述している。

しかし、「どちらかというとそう思わない」が事前の３%から事後では６%と３ポイント上昇した。表 16 から、「どちらかというとそう思わない」と答えた生徒は、事前では、仲間にたくさん助けてもらったこと、運動ができなくても楽しめていたことを記述していたが、事後では、言葉掛けができなかったことを記述していた。

これらのことから、多くの生徒は、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、共生の意欲を行動や言葉掛けとして表すことができたが、様々な活動において声を出すことが苦手な生徒は、共生の必要性を理解していても、言葉掛けで表すことができなかったと考えられる。そのため、認め合い活動を、カードに書くだけではなく、カードを渡すときに言葉でも伝えるなどの工夫が必要であったと考える。

イ　協力の意欲が行動として表れたか

図 23 は、事前・事後アンケートの「仲間をサポートすることができたか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

表 17 は、事後アンケートの「仲間をサポートすることができたか」という質問に対する回答理由の記述（抜粋）である。

表 18 は、事後アンケートの「仲間をサポートすることができたか」という質問に対して、「どちらかというとそう思わない」と回答した生徒の回答理由の記述である。なお、これらの生徒は、事前では「そう思う群」であった生徒である。

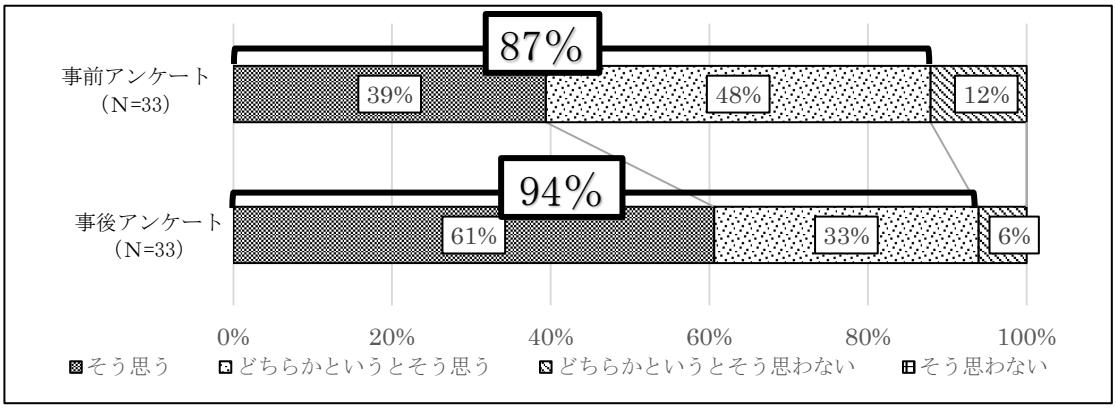


図 23　「仲間をサポートすることができたか」に対する回答割合の事前・事後の比較

表 17　「仲間をサポートすることができたか」に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒W：最初は少し強く球出ししていましたが、後半の方からはやさしく球出しができました。
	生徒Ｘ：トリオでの課題点を見付けて、その課題を無くすためのメニューなどを考えて取り組むことができた。
苦手	生徒Ｙ：相手意識で相手が捕りやすいボールを出したりしていたので「１．そう思う」に回答しました。
	生徒Ｚ：アドバイスをしながら球出しができたから。

表 18　「仲間をサポートすることができたか」に対して「どちらかというとそう思わない」と回答した生徒の回答理由の記述

	事前アンケート	事後アンケート
生徒 a	一緒に練習する時に、しやすいように自分から動いているから。	ボールを出すときに出し方が悪かったので。
生徒 b	それぞれサポートしてくれる人がいるから。	自分は苦手だから、仲間にサポートすることはあまりできなかったけれど、自分は仲間、友だちにたくさんサポートされてきた。

図 23 を見ると、「そう思う群」の割合は、事前では 87%だったのに対して、事後では 94%と 7 ポイント上昇し、多くの生徒が肯定的な回答を示した。

また、表 17 を見ると、生徒W・Ｙは、相手の技能等に配慮した球出しができたことを記述している。生徒Ｘ・Ｚは、仲間の課題を解決するためのサポートをすることができたことを記述している。

これらのことから、多くの生徒は、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、協力の意欲を行動として表すことができたが、表 18 の通り、今回のバレーボールの授業では、少し上手くいかなかった生徒や、仲間をサポートするより、仲間のサポートをたくさん受けたと感じている生徒もいた。どのようにサポートすればよいかを丁寧に指導するなど、バレーボールが苦手な生徒でも、仲間をサポートすることができるような工夫をするべきであったと考える。

ウ　参画の意欲が行動として表れたか

図 24 は、事前・事後アンケートの「積極的に話合いに参加することができたか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

表 19 は、事後アンケートの「積極的に話合いに参加することができたか」という質問に対しての回答理由の記述（抜粋）である。

表 20 は事前・事後アンケートの「『積極的に話合いに参加することができたか』という質問に対して、『そう思わない群』→『そう思わない群』と変化がなかった生徒の記述」である。

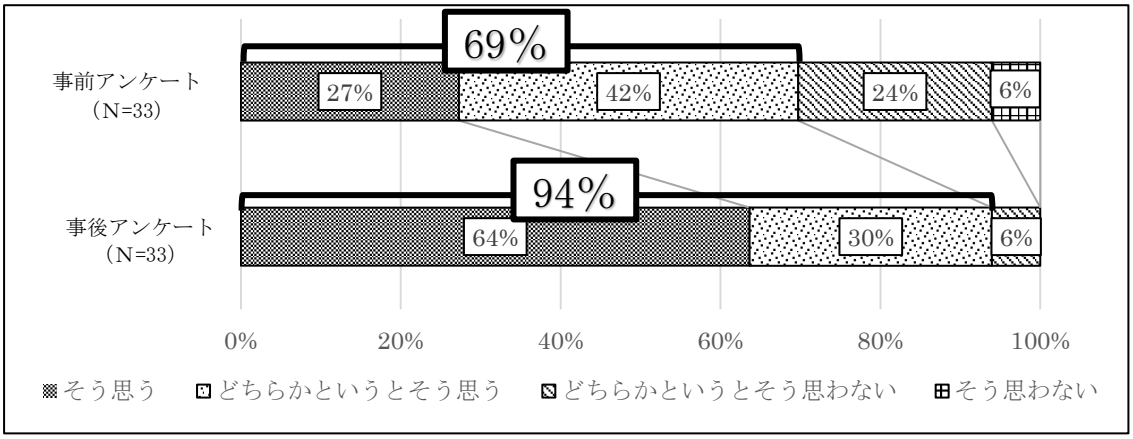


図 24　「積極的に話合いに参加することができたか」に対する回答割合の事前・事後の比較

表 19　「積極的に話合いに参加することができたか」の質問に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒ｃ：上手くいかなかったことに対し、どうすればいいか、トリオやチームで話し合えたからです。
	生徒ｄ：どのポジションにいればラリーが続くかとか、チームの人とたくさん話をすることができて、臨機応変にできたと思う。
苦手	生徒ｅ：仲間と話し合って課題を解決できたから。
	生徒ｆ：トリオの人たちとフォーメーションなどについてしっかり話し合えたと思うから。

表 20　事前・事後「積極的に話合いに参加することができたか」の質問に対する「そう思わない群」→「そう思わない群」と変化がなかった生徒の回答理由の記述

事前「そう思わない群」→事後「そう思わない群」と変化がなかった生徒		
	事前アンケート	事後アンケート
生徒ｇ	人と話すのが苦手で、聞かれるまであまり発言しませんでした。	上手な人の意見に賛成するだけのことが多かった。
生徒ｈ	あまり多くの人と話合いができなかったから。	自分の考えは述べたけれど、聞かれて答えただけで、積極的ではないと思ったから。

図 24 を見ると、「そう思う群」の割合は、事前では 69%だったのに対して、事後では 94%と 25 ポイント上昇し多くの生徒が肯定的な回答を示した。

表 19 を見ると、バレーボールが得意不得意に関わらず、課題解決のために積極的に話合いに参加することができたことを記述している。

しかし、表 20 を見ると、話合いや発言に対して苦手意識のある生徒は、話合いに参加することはできたが、自分の意見を積極的に言うところまでには至らなかったと考えられる。

これらのことから、多くの生徒は共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、参画の意欲を行動として表すことができるようになったが、話合いや発言に苦手意識のある生徒には課題があった。そのため、そのような生徒に対する配慮や手立ても必要であったと考える。

エ　チームワークの高まりを感じることができたか

図 25 は、今回の 10 時間の授業の事後アンケートでの、「チームワークは向上したと思うか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

また、表 21 は「チームワークは向上したか」の回答理由の記述（抜粋）である。なお、表の上段２名の生徒はバレーボールが得意な生徒、下段２名の生徒はバレーボールが苦手な生徒の記述である。

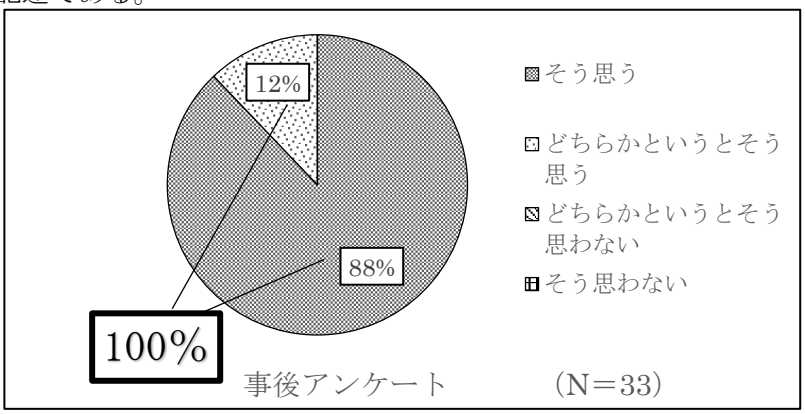


図 25　「チームワークは向上したと思うか」に対する回答割合

表 21 「チームワークは向上したと思うか」の回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒ｉ：初めのころに比べて、声掛け、アドバイス、相手意識※などがとても高まったと思うからです。
	生徒ｊ：協力し課題を解決できるに至ったから。
苦手	生徒ｋ：誰も責めなかったり、たくさんポジティブな声掛けがあった。
	生徒ｌ：上手くいかなくても、お互い支え合って上手くいったらお互い褒め合ったり全力で喜ぶことができたから。

※生徒ｉの記述にある「相手意識」とは、授業中に生徒から挙がった言葉であり、「相手の立場を意識したり考えたりすること」を意味している。

図 25 を見ると、「そう思う群」の割合は 100％であり、全ての生徒がチームワークの向上を実感している。

表 21 を見ると、共生の視点を重視したことにより、相手を意識した行動や仲間を責めないこと、互いを認めたり褒めたりということへの意識が高まったこと、また、課題を解決するために協力できたこと、互いに支え合うことやアドバイスが増えたことなどが書かれていた。

また、表 22 は、事後アンケートでの、チームワークの向上のために「自分が心がけたこと」、「仲間が取り組んでいたことで、特によかったこと」という項目に対する生徒の記述で多く使用されていたキーワードの上位五つである。なお、同一生徒が複数のキーワードを使用している場合もあるので、使用人数の合計と標本数は異なる。

表 22　事後アンケートのチームワークの向上のために「自分が心がけたこと」、「仲間が取り組んでいたことで、特によかったこと」の記述で多く使用されたキーワード上位五つ(N＝33)

自分が心がけたこと	使用人数（%）	仲間が取り組んでいてよかったこと	使用人数（%）
声掛け	20 名 (60%)	声掛け	16 名 (48%)
アドバイス	6 名 (18%)	アドバイス	11 名 (33%)
励まし	3 名 (9%)	応援	3 名 (9%)
相手意識	3 名 (9%)	励まし	2 名 (6%)
応援	2 名 (6%)	褒める	2 名 (6%)

表 22 のように、それぞれ「声掛け」が最も多く、次いで「アドバイス」が多かった。

自分が心がけたことと、仲間が心がけていてよかったこと共に「声掛け」または「アドバイス」という言葉を約 80%の生徒が使用しており、チームワークを高めるために生徒たちは、声掛けやアドバイスを大切にしていたことが伺える。

これらのことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、互いを認め合うなどの意識を高めるとともに、生徒間の声掛けやアドバイスを増やし、全ての生徒にチームワークの高まりを実感させることができたと考えられる。

オ　仲間づくりの成果

表 23 及び図 26 は、毎時間の個人カードでの仲間づくり調査票の推移を表したものである。各項目の回答を「はい」は３点、「どちらでもない」は２点、「いいえ」は１点として、毎時間の５因子及び総平均を算出した。

表 23　仲間づくり調査票の推移（５因子及び総平均）

	１時間目	２時間目	３時間目	４時間目	５時間目	６時間目	７時間目	８時間目	９時間目	10 時間目
集団的達成	2.13	2.44	2.59	2.68	2.56	2.84	2.82	2.89	2.86	2.93
集団的思考	2.34	2.89	2.86	2.71	2.89	2.88	2.94	2.92	2.89	2.97
集団的相互作用	2.34	2.61	2.88	2.74	2.81	2.86	2.82	2.86	2.81	2.88
集団的人間関係	2.34	2.56	2.75	2.68	2.76	2.86	2.95	2.89	2.94	2.97
集団的活動の意欲	2.77	2.76	2.83	2.82	2.89	2.83	2.90	2.94	2.91	2.92
総平均	2.38	2.65	2.78	2.73	2.78	2.85	2.89	2.90	2.88	2.93

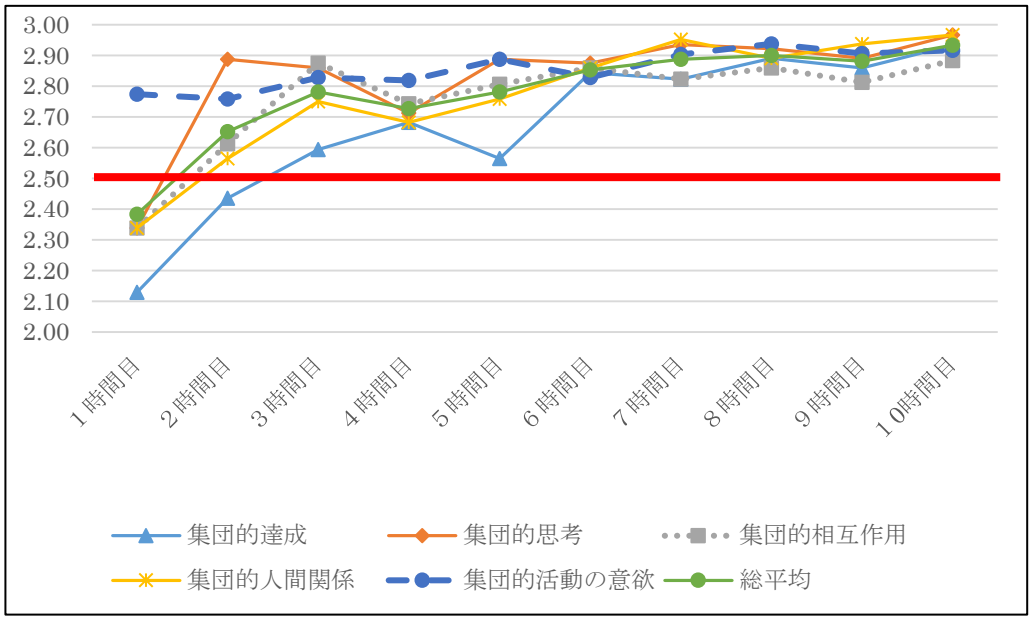


図 26　仲間づくり調査票の推移（５因子及び総平均）

平均得点が 2.5 点以上の平均点を得ていることが授業成果のめやすとされているが、表 23 を見ると、１時間目は、集団的活動の意欲以外の因子で 2.5 点を下回った。これは、生活班等とは全く関係のないチームを組んだこと、最初の授業でいきなり試しのゲームを行い、全くうまくいかなかったことが原因と考えられる。

２時間目は、集団的達成のみ 2.5 点を下回った。これは、二人一組での個人的技能の練習が、この時間の多くを占めていたため、チームで活動する場面がほとんどなかったことが原因と考えられる。

また、本研究では、チームワークを高めるために、チームとして大切にすることをチームワークルールとして作成する活動を設定した。２時間目は５因子中４因子及び総平均で2.5点を上回り、３時間目以降は、全ての因子及び総平均で2.5点を上回った。そのため、２時間目のチームワークルールの作成及び３時間目の確認が、効果的であったと考える。

さらに、図26を見ると、概ね右肩上がりの推移であった。これらのことから、本研究では仲間づくりの成果がみられたと考えられる。

以上のことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、バレーボールの得意不得意に関わらず、仲間との関わり方についての意識が行動として表れ、チームワークが高まったと考える。

検証の視点「（３）チームワークは高まったか」のまとめ

・共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、多くの生徒は共生の意欲を行動として表すことができたが、声を出すことが苦手な生徒は、仲間への言葉掛けができなかったことが考えられる。

・多くの生徒が、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、協力の意欲を行動として表すことができたが、表わそうとしても少し上手くいかなかった生徒や、仲間をサポートするより、仲間のサポートをたくさん受けたと感じている生徒もいた。

・多くの生徒は共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、参画の意欲を行動として表すことができたが、話合いや発言に苦手意識のある生徒には課題があった。そのため、そのような生徒に対する配慮や手立てを行うべきであった。

・共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、互いを認め合うなどの意識を高めるとともに、生徒間の声掛けやアドバイスを増やし、全ての生徒にチームワークの高まりを実感させられることができたと考えられる。

・仲間づくり調査票では、３時間目以降全ての因子で2.5点を上回ったこと、得点が概ね右肩上がりだったことから、仲間づくりの成果があったと考えられる。特に２時間目のチームワークルールの作成及び３時間目の確認が、かなり効果的だったと考える。

（４）誰もがバレーボールを楽しむことができたか

ア　自分自身がバレーボールの楽しさを味わうことができたか

図 27 は、事前アンケート「バレーボールは楽しみか」、事後アンケートの「バレーボールは楽しかったか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

また、表 24 は事後アンケートの「バレーボールは楽しかったか」に対する回答の理由である。なお、表の上段２名の生徒はバレーボールが得意な生徒であり、下段２名の生徒はバレーボールが苦手な生徒である。

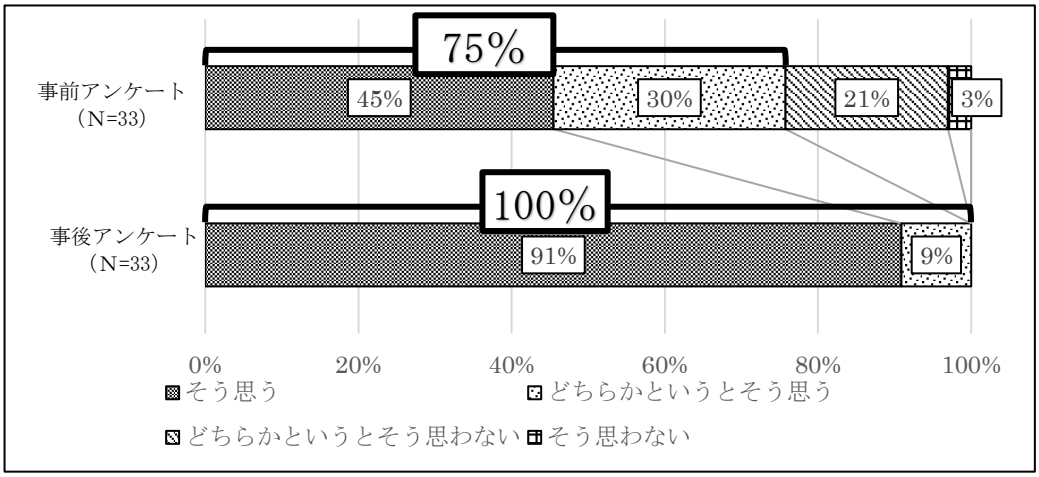


図 27　「バレーボールは楽しみか（楽しかったか）」に対する回答割合の事前・事後の比較

表 24　「バレーボールは楽しかったか」に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒ｍ：沢山ゲームをしてラリーをつなげたり、仲間とコミュニケーションを取ってゲームをすることでより盛り上がったり、すごく楽しむことができた。
	生徒ｎ：始めの時よりもパスもつなげることができたし、チームワークも深まったから。
苦手	生徒ｏ：上手くいかなくても励ましてくれるし、上手くいったら褒めてくれるから。チームの人がつなげようと頑張ってくれたから。
	生徒ｐ：最初よりもラリーが続くようになったから。

図 27 を見ると、「そう思う群」の割合は、事前では 75%だったのに対して、事後では 100%と 25 ポイント上昇し、全ての生徒が肯定的な回答を示した。その回答理由として、６割の生徒がチームワークや仲間との関わりに関する内容を記述していた。

また、表 24 のように、チームワークの高まりにより、得意不得意に関わらず、バレーボールの楽しさ（p. ４表１参照）を味わうことができたとされる記述もみられた。

さらに、バレーボールが苦手であり、事前アンケートで、「そう思わない」と回答した生徒は、事後アンケートでは「そう思う」へと変容した。その生徒の回答理由については表 25 のとおりである。

表 25　事前アンケートで、「そう思わない」と回答した生徒の回答理由の変容

事前アンケート	事後アンケート
動くのもボールを使うのも苦手だから。	仲間の声掛けがあったおかげで頑張ろうという気持ちなり、いつもより楽しむことができた。

表 25 を見ると、事前では球技が苦手で、不安に感じていたが、事後では仲間の関わりのおかげで、バレーボールを楽しむことができたと記述している。また、この生徒の個人カードの記述では、表 26 のような変容がみられた。

表 26　事前アンケートで、「そう思わない」と回答した生徒の個人カードの記述の変容

チームワークの向上のために仲間が取り組んでいたことで、よかったこと	２時間目	アンダーハンドパスの練習の時、アドバイスや良かったところを言ってくれた。
	３時間目	アドバイスや声掛けをしてくれていた。
	７時間目	ボールを優しく打つことを意識してくれていた。
	９時間目	いつも声掛けしてくれているし、私がミスしたときカバーしてくれた。
感じたことや学んだこと	10 時間目	始めのころは正直やりたくなかったけど、チームの人の声掛けや、アドバイスのおかげで上達できたり、楽しむことができた。 上手い人とか、苦手な人とか関係なく、お互いにカバーし合って、楽しくスポーツができるということ**を学んだ**。

表 26 を見ると、仲間がアドバイスや声掛けをしてくれたり、自分のミスを仲間がカバーしてくれたりするなどの経験を通して、上達し、楽しむことができたこと、バレーボールの授業を通して、互いにカバーし合うことで、得意不得意に関わらず、楽しむことができることを学ぶことができたことが見て取れる。

さらに、バレーボールが得意な生徒は事後アンケート「バレーボールは楽しかったですか」の回答理由及び、個人カードに表 27 ように記述している。

表 27　バレーボールが得意な生徒の個人カードの記述

<table>
<tr><td rowspan="2">チームワークの向上のために仲間が取り組んでいたことで、よかったこと</td><td>３時間目</td><td>うまくいったときに声をかけてくれた。</td></tr>
<tr><td>５時間目</td><td>失敗したときに、「次は頑張ろう」など声をかけてくれた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">感じたことや学んだこと</td><td>４時間目</td><td>今日はラリーゲームの時にうまくつなぐことはできなかったけど、チームの人がアドバイスをくれたり、応援してくれて嬉しかった。</td></tr>
<tr><td>10 時間目</td><td>チームの人と捕りやすいパスをしあったり、ゲームでは励まし合ったり応援をして楽しかった。
最初は、チームの人とあまりしゃべっていなくて、意見を言い合えてなかったけど、今日までにチームでアドバイスをしあったり、応援をしたりして、仲良くなれたし、チームワークが深まってよかったです。それに相手意識を持つことで、パスもつながるし、チームワークも深まることがわかりました。</td></tr>
<tr><td colspan="2">事後アンケート</td><td>はじめの時よりもパスをつなげることができたし、チームワークも深まったから。</td></tr>
</table>

表 27 を見ると、仲間に声を掛けられることで、嬉しさを感じている。また、仲間とアドバイスをし合ったり、励まし合ったり、応援をし合ったりすることなどでチームワークが高まることや、互いを思い合うことでパスがつながったりすることなどを学んだと記述されている。そしてそれが、事後アンケートにあるように、バレーボールを楽しむことにつながったと見て取れる。

以上のことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、生徒の中に、相手を思った行動や言葉掛けが増え、チームワークが高まり、生徒同士が関わり合い、支え合いながら活動できたことや、パスがつながるようになったことなど、得意不得意に関わらず、誰もがバレーボールを楽しむことにつながったと考える。

イ　仲間がバレーボールの楽しさを味わうことができたか

図 28 は、事後アンケートの「仲間がバレーボールの楽しさを味わうことができたか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

また、表 28 は「仲間がバレーボールの楽しさを味わうことができたか」に対する回答の理由である。なお、表の上段２名の生徒はバレーボールが得意な生徒であり、下段２名の生徒はバレーボールが苦手な生徒である。

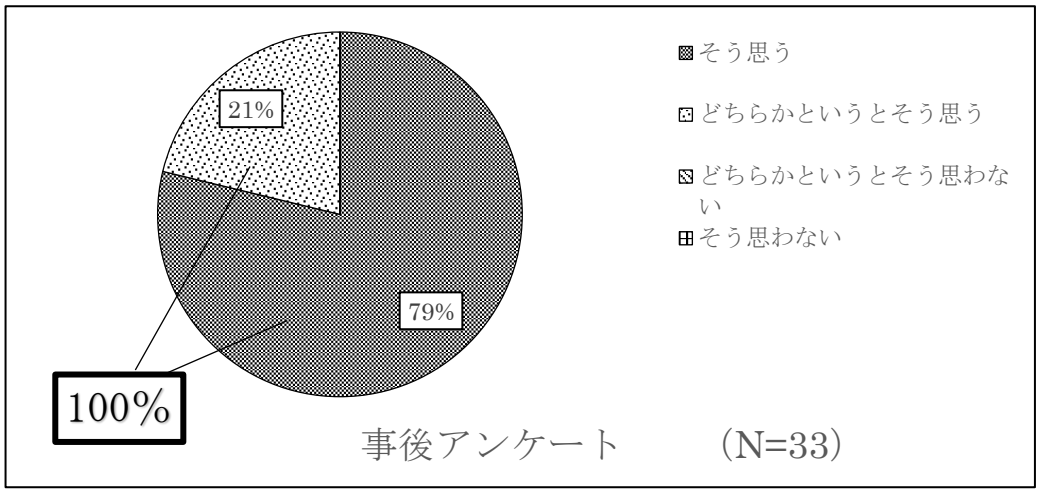


図 28　「仲間がバレーボールの楽しさを味わうことができたか」に対する回答割合

表 28　「仲間がバレーボールの楽しさを味わうことができたか」に対する回答理由の記述（抜粋）

得意	生徒ｑ：全員がボールに触れ返球できたから。
	生徒ｒ：みんなで応援したり、意見を出したりして、ゲームも楽しかったから。
苦手	生徒ｓ：上手く返せたときにみんな喜んでいたから。
	生徒ｔ：笑いながら楽しそうに試合をしていたり、話合いはチームの全員で真剣にしていた。

図 28 を見ると、「そう思う群」の割合は 100%と全ての生徒が肯定的な回答を示した。

また、表 28 を見ると、生徒ｑ・ｓはボールをつないで返球すること、生徒ｒ・ｔは仲間同士の関わりによることを記述している。

これらのことから、チームのメンバー同士の関わり合いやパスをつないで返球することができたことなど、仲間もバレーボールの楽しさを味わうことができたと生徒たちは感じていると考えられる。

ウ　バレーボールを楽しむために大切な要素についての認識

本研究では、誰もが楽しむことができるよう、チームワークという言葉を意図的に使い、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を行った。表 29 は、事前アンケート事後アンケートの「みんながバレーボールを楽しむために、大切なこと」という質問に対する生徒の記述で多く使用されていたキーワードの上位五つである。なお、同一生徒が複数のキーワードを使用している場合もあるので、使用人数の合計と標本数は異なる。

表 29　事前・事後アンケート「みんながバレーボールを楽しむために、大切なこと」の記述で多く使用されたキーワード上位五つの比較

事前アンケート	使用人数	事後アンケート	使用人数
声掛け	17 名	声掛け	11 名
協力	８名	チームワーク	９名
アドバイス	４名	アドバイス	５名
励まし	３名	協力	４名
技能向上	３名	技能向上	３名

表 29 を見ると、事前・事後共に「声掛け」という言葉が１番多く、また、事前アンケートではほとんど使われていなかった「チームワーク」という言葉が、事後アンケートでは、２番目に多く使われていた。このことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、生徒たちはチームワークを高めることが、誰もがバレーボールを楽しむために大切な要素であるということを、捉えるようになったと考えられる。

以上のことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、チームワークが高まり、誰もがバレーボールを楽しむことができたと考える。

検証の視点「（４）誰もがバレーボールを楽しむことができたか」のまとめ

・仲間の支え、仲間との関わり、チームでボールをつなぐことやチームワークの高まりにより本研究は誰もが楽しめるバレーボールになったと考えられる。生徒たちも、特にチームワークの高まりがバレーボールを楽しむために大切であると捉えている。

（５）仮説検証のまとめ

・形成的授業評価の結果から、概ねの生徒は授業を肯定的に捉えていた。事後アンケートからも、得意不得意に関わらず、多くの生徒はバレーボールの単元を肯定的に捉えていた。
・共生の視点を重視した、チームワークに関わる発問や活動を通して、「共生・協力・参画」の大切さ、特に「協力」への気付きを促すことに効果があった。
・共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習活動は、チームワークを高めることに有効であった。
・ほとんどの生徒は共生や協力、参画の意欲が行動として表れたが、発言や声を出すことが苦手な生徒など、一部の生徒へは課題があった。
・共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、互いを認め合うなどの意識を高めるとともに、生徒間の声掛けやアドバイスを増やし、全ての生徒にチームワークの高まりを実感させられることができたと考えられる。また、仲間づくり調査票の結果からも効果があったと考えられる。
・チームワークの高まりにより本研究は誰もが楽しめるバレーボールになったと考えられる。生徒たちも、特にチームワークの高まりがバレーボールを楽しむために大切であると、捉えていることが考えられる。

第４章　研究のまとめ

１　研究の成果と課題

本研究では、「第２学年球技（ネット型「バレーボール」）において、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、チームワークが高まり、誰もがバレーボールを楽しむことができるであろう」との仮説から、授業を実施した。

その結果、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習が、チームワークが高まり、誰もがバレーボールを楽しむ上で、有効に機能することが示唆された。本研究の成果と課題は次のとおりである。

（１）共生の視点を重視することの有効性

この度の「要領」の改訂にあたり、「答申」の趣旨を踏まえて、「共生の視点を重視して改善を図ること」（文部科学省　2018　p. 10）と改訂の方針が示され、『解説』では、共生に関わる内容として、「様々な違いを超えて，参加者全員が楽しんだり達成感を味わったりするための工夫や調整が求められる場合があることなどを理解し，取り組めるようにする」（文部科学省　2018　p. 128）と示されたことから、本研究では、誰もがバレーボールを楽しむために共生の視点を重視した授業を行った。

共生の視点を重視することにより、生徒同士が支え合ったり、前向きな声を掛け合ったりするなど、チームワークを高めることに有効に機能した。

また、発問によって、仲間との関わり方について気付きを促すことで、より共生の意識を高めることが出来たと考える。

さらに、バレーボールが苦手な生徒の個人カードの記述に「失敗したり、落ち込んでいるとき、アドバイスや励ましてくれてほっとしました」「自分に足りないものをカバーしてくれて頑張ろうと感じました」というような、共感や思いやりの行動や言葉掛けが感じられるものがあり、共生の視点を重視することでバレーボールが苦手な生徒に安心感を与え、前向きに取り組むことに有効であったと考えられる。

しかし、事後アンケートの「違いを認めたり、違いを乗り越え、全員で楽しむための言葉掛けや行動ができたか」という質問に対して「声を出すのが苦手であまりできなかった」と記述した生徒もおり、様々な活動において声を出すことが苦手な生徒には、「共生」の必要性を理解していても、言葉掛けで表すことができないなどの課題があった。今後は、バレーボールが苦手な生徒への手立てだけでなく、声を出すことが苦手な生徒への配慮や手立ても必要であると考える。

（２）仲間との関わり方について考える学習の有効性

本研究では、共生の視点を重視した発問とそれに伴う、チームワークルールの作成・確認や認め合い活動、誰もがゲームを楽しむためのゲームでの方針づくりを中心とした学習活動（pp. 22～24参照）など、仲間との関わり方について考える学習を取り入れ授業を行った。事後アンケートの「バレーボールは楽しかった」と回答した理由として、６割の生徒がチームワークや仲間との関わりについて記述したことや、「上手くいかなくても励ましてくれるし、上手くいったら褒めてくれるから」、「仲間の声掛けがあったおかげで頑張ろうという気持ちなり、いつもより楽しむことができた」と記述した生徒がいたこと、また、個人カードに、「チームの人と捕りやすいパスをし合ったり、ゲームでは励まし合ったり応援して楽しかった」、「始めの頃は正直やりたくなかったけど、チームの人の声掛けやアドバイスのおかげで上達できたり、楽しむことができた」などの記述もみられ、仲間との関わり方について考える学習がバレーボールを楽しむことに有効に機能した。

（３）本研究におけるゲームルールの工夫について

本研究では当初、単元を通して同じルールでゲームを行う予定であったが、ほとんどの生徒がバレーボールを行うのが初めてだったことや新型コロナウィルス感染症感染防止対策のための短縮授業などにより、当初の計画では、ラリーが続かずバレーボールの楽しさを生徒たちが十分味わうことができないと考え、単元途中でルールをやさしくする様々な変更を行った。本来であれば、生徒の実態を授業実施前に調査した上で、適正なルールを設定し、単元を通してルールを変えないことが、生徒たちにとっても、技能の向上等を実感するために望ましいと考えられる。今回の研究を通し、改めてルール設定の難しさを実感した。

しかし、ルールを変更することで、様々なメリットもあった。

まず、「３人制」のルールについては、役割分担が明確になることや、チームの全員がボールに関与することに有効であった。また、「ワンバウンドを認める」ことは、ボールを保持してはいけないというバレーボールの特性を保ちながら、ボール操作の難しさを緩和することや時間的余裕を作ることに有効であった。さらに、ワンバウンドの使用の有無や触球回数によって点数に差をつけることにより、ワンバウンドを使い確実にパスをつないで返球する姿や、高得点となるノーバウンドにて３回で返すことに挑戦する姿も見られ、技能レベルに応じた展開でゲームを行うことなどに有効であった。

このように本研究におけるゲームの工夫において、生徒たちは、基本的なボール操作と定位置に戻るなどの動きについて、身に付けることができたが、さらに、空いた場所への攻撃を中心としたラリーが継続するようなゲームの様相にするためには、点数の入り方などの更なる工夫などが必要であると考えられる。

（４）技能の向上について

図 29 は、事後アンケートの「アンダーハンドパスで狙った場所にボールを返すことができるようになったか」「オーバーハンドパスで狙った場所にボールを返すことができるようになったか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

図 30 は、事後アンケートの「３人でボールをつなぎ相手コートに返球できるようになったか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

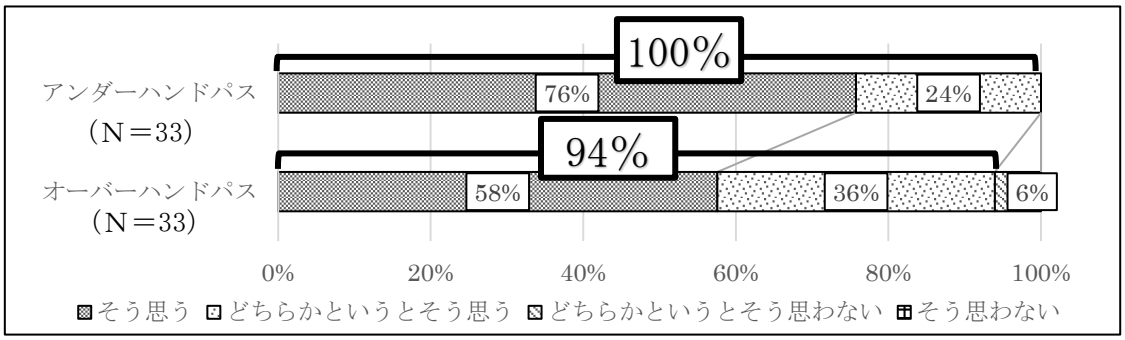


図 29 「アンダーハンドパスで狙った場所にボールを返すことができるようになったか」「オーバーハンドパスで狙った場所にボールを返すことができるようになったか」に対する回答割合

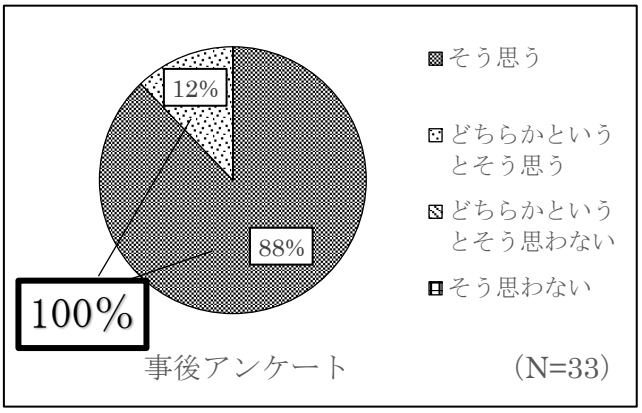


図 30 「３人でボールをつなぎ相手コートに返球できるようになったか」に対する回答割合

本研究では、当初、技能の向上についても検証する予定であったが、前述（p. 60－１（３））の通り、単元途中でゲームのルールを変更した。そのため、技能の向上について検証をすることができなかった。

しかし、図 29、30 を見ても分かるように、多くの生徒は個人的技能及び集団的技能の向上を実感している。

また、図 31 は、映像から見た、「４～６時間目ラリーゲームでの返球率と８～10 時間目メインゲームでの返球率」である。これは、ラリーゲームとメインゲーム共に、ノーバウンドもしくは、ワンバウンドを使い３人で３回でつないで相手コートに返球したものを集計し、全プレイでの割合を出したものである。なお、メインゲームの４回以上の触球による返球は、失敗としてカウントしている。

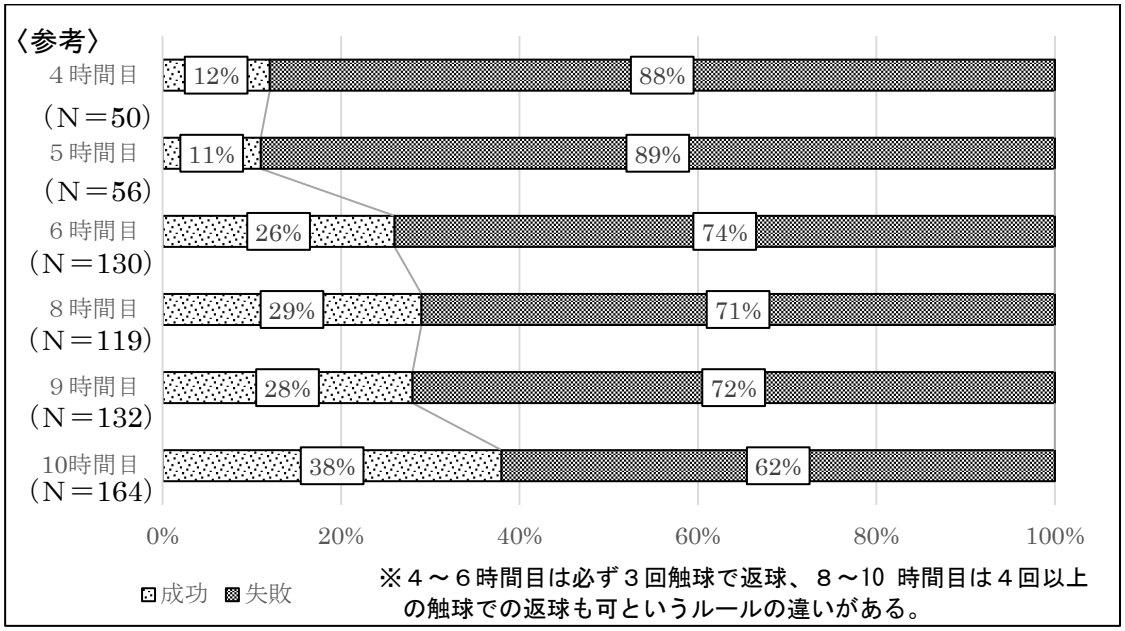


図 31　「４～６時間目ラリーゲームでの返球率と８～10 時間目メインゲームでの返球率」

図 31 を見ると、４～６時間目と８～10 時間目ではルールが違うため、明確な比較はできないが、４時間目の返球率が 12%だったのに対して、10 時間目では、38%と 26 ポイント上昇している。このことから、共生の視点を重視し、仲間との関わり方について考える学習を通して、仲間と支え合いながら、個人やチームの課題を解決し、技能を向上することができたことが推察される。

さらに、表 30 は、バレーボールに苦手意識がある生徒の個人カードの記述内容である。

表 30　バレーボールに苦手意識がある生徒の個人カードの記述内容

１時間目	バレーボールとかの球技系をまったくやったことがないので、足を引っ張っているように感じましたが、それを踏まえて頑張りたいです。
４時間目	失敗したり、落ち込んでいるとき、アドバイスや励ましてくれてほっとしました。
６時間目	自分に足りないものをカバーしてくれて頑張ろうと感じました。
10 時間目	すごく成長を感じられて、パスとかも最初よりすごくできました。

表 30 を見ると、最初はバレーボールに不安を抱えていたが、共生の視点を重視したことにより、仲間との関わりを通して安心感を持って取り組むことができ、最後は技能の向上を実感することが出来たのではないかと考えられる。

以上のことから、多くの生徒が技能の向上を実感していると回答し、映像からも技能が向上していることが伺えるが、共生の視点を重視したこととの関連性は、生徒の内面的な部分でもあるため、映像からだけでは検証が難しい。しかし、バレーボールが苦手な生徒の毎時間の個人カードの記述からは、授業が進むにつれ、安心したり、意欲的になったり、最後は技能の向上を感じたといった内容の記述も見られ、共生の視点を重視することが技能の向上にもつながったとも推察される。この関連性については、今後の研究課題としたい。

２　研究の成果と課題を基にした授業づくりのポイントの提案

前述の研究の成果と課題を踏まえ、チームワークが高まり、誰もが楽しむことができるための授業づくりのポイントを次のとおり提案する。

（１）発問とそれに伴う活動を取り入れること
　ア　共生の視点を重視した発問や活動
　イ　課題認識・共有、解決を目指すことができる発問や活動
　ウ　チームワークと技術・戦術の双方に関連するような発問や活動
（２）体力や技能の差等に関わらず、誰もがゲームを楽しめるようなルールの工夫を行うこと

３　今後の展望

（１）共生の視点を重視することについて

今回の研究では、共生の視点を重視して授業を行った。共生の視点を重視することにより、運動が苦手な生徒に安心感を与えること、誰もが楽しむことにつながることなどの成果があった。また、生徒の授業の感想に「相手の個性を知ることを学んだ」、「クラスがまとまった」と記述があったように、互いを思いやり支え合い、力を合わせて課題を解決するという経験を通して、授業の枠を超えた人と人との繋がりを強めることなどの成果も得ることができた。

しかし、「共生」という言葉は生徒にとって馴染みのない言葉であるため、理解させることに難しさを感じた。また、「共生」について指導する際に、「運動が苦手な生徒に合わせて、得意な生徒が手加減をすること」と誤解を与えてしまわないように伝える難しさも感じた。

また、本研究では、活動時間の確保のため、筆者がルールを決め、それを生徒に提示したが、梅澤が提唱する、「ゲームで負けたチームが自分たちのプレイをし易くしたり、相手のプレイを難しくしたりするルールを提案し、両チームで合意形成の上、全員が次のゲームに本気で取り組むという自分たち向けに『適合（アダプテーション）』させる」（梅澤　2020）アダプテーションゲームなどを取り入れることも、共生の視点を重視する上で有効ではないかと考える。

今後は、生徒たちが「共生」について、理解しやすい工夫を行い、より一層、共生の視点を重視することを大切に、より良い授業づくり、生徒の人間関係づくりに励んでいきたい。

（２）誰もが楽しむことができる授業について

今回の研究は、「運動の得意不得意に関わらず、誰もが楽しむことができる授業をするには、どうしたらよいか」という問いからスタートした。

この研究を通して、体育の指導は技能を向上させることと共に、仲間との関わりが楽しさを感じさせる重要な要素であること、さらに、ルールの工夫も楽しさを感じさせるのに重要であることに改めて気付くことができた。今後も、生徒の技能を向上させる工夫、生徒同士の関わりを良いものにする工夫、ルールの工夫を大切にし、授業づくりをしていきたい。

４　おわりに

最後になりましたが、本研究を行うに当たって、大変お忙しい中、検証授業の準備から実施まで多くの御協力をいただいた横須賀市立常葉中学校の平井慶一郎校長、小平巧一郎教頭、第２学年所属の先生方、保健体育科の先生方、お忙しい中検証授業に御協力や御参観いただいた先生方に心より感謝申し上げます。また、専門的な見地から様々な御指導・御助言をいただいた、日本体育大学の岡出美則教授、横須賀市教育委員会保健体育課の岸洋平指導主事に感謝申し上げます。さらに、本研究の趣旨を御理解いただき、御協力いただいたクラスの保護者の皆様、そして、10 時間の検証授業に一生懸命取り組んでくれた生徒の皆さん、本当にありがとうございました。

［引用・参考文献］

国立教育政策研究所　2020　「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【中学校保健体育】」　p. 108

小学館大辞泉編集部　2012a　『大辞泉第二版　上巻』小学館　pp. 946-947

小学館大辞泉編集部　2012b　『大辞泉第二版　下巻』小学館　p. 2308

中央教育審議会　2005　「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」　p. ６

中央教育審議会　2016　「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

文部科学省　2018　『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説保健体育編』2018 年

文部科学省　2019　「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」別紙４　各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨　p. 27

岩田靖　2012　『体育の教材を創る　運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』大修館書店

岩田靖　2016　「ボール運動の教材を創る　ゲームの魅力をクローズアップする授業づくりの探究」　大修館書店
梅澤秋久、苫野一徳　2020　『真正の「共生体育」をつくる』　大修館書店　p.159
小沢一仁・重光由加　2018　「授業現場における質問と発問の違い―語用論と心理学の視点から―『東京工芸大学工学部紀要 Vol.41　No.２』」　p.２
岸　洋平　2011　「平成 23 年度神奈川県立体育センター長期研修研究報告　『技能』をイメージさせ、身体活動につなげるバレーボールの学習－わかりやすい言葉を使った教え合い学習を通して－」　神奈川県立体育センター　p.４
小林一久　1995　『体育授業の理論と方法』　大修館書店　p.96
小松崎敏、高橋健夫　2003　「仲間づくりの成果を評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版　pp.16-19
杉山重利・高橋健夫・園山和夫・細江文利・本村清人　2001　『新学習指導要領による中学校体育の授業　下巻』　大修館書店　p.26
諏訪哲郎・小堂十・丸茂哲雄・多田孝志　2020『学校×SDGs　時代を生き抜く教育への挑戦』キーステージ 21　p.212
関野智史　2013「ネット型ゲームの授業計画　小中高の連携によるネット型ゲームの一貫指導の提案―バレーボールを軸として　『体育科教育５月号』」大修館書店
高橋健夫・林恒明・藤井喜一・大貫耕一　1994『ゲームの授業』大修館書店　p.14
高橋健夫、長谷川悦示、浦井孝夫　2003「体育授業を形成的に評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版　pp.12-15
ダニエルW・ミドゥラ・ドナルドR・グローバー著　高橋健夫　監訳　2000　『チャレンジ運動による仲間づくり　楽しくできる「体ほぐしの運動」』大修館書店　p.iii
津田幸保　2013「小学校児童に対するリズムジャンプの効果について『美作大学・美作大学短期大学部紀要 Vol.58』」　pp.11-17
福原祐三・鈴木理　2005　『みんなが主役になれるバレーボールの授業づくり』大修館書店　pp.92-93
真鍋顕久　2004　「社会福祉の観点からの共生思想－仏教における共生－　『名古屋女子大学紀要』」　p.56
三崎隆　2014『これだけは知っておきたい「学び合い」の基礎・基本』学事出版　p.３
リンダ・L・グリフィン　他著　高橋健夫・岡出美則　監訳　1999『ボール運動の指導プログラム』大修館書店